広域営農団地農道整備事業佐久南部地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

－八千穂村内－

馬込（まごめ）遺跡

2005．3

長野県佐久地方事務所
長野県埋蔵文化財センター

広域営農団地農道整備事業佐久南部地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

－八千穂村内－

馬込（まごめ）遺跡

2005．3

長野県佐久地方事務所
長野県埋蔵文化財センター

平成14年度　調査区全景（南から）

平成15年度　調査区全景（西から）

序

本書は、南佐久郡八千穂村に所在する馬込遺跡の発掘調査報告書です。このたび、南佐久郡内の農業生産の近代化や農業生産物の輸送合理化を目的とする広域営農団地農道整備事業が馬込遺跡内で実施されることとなり、平成14・15年度の2ヶ年にわたって緊急発掘調査を行いました。本書は、その成果を記録として保存し、広く一般に周知することを目的としたものです。

八千穂村における発掘調査は、昭和27年に行われた中松井遺跡を嚆矢とします。昭和58年から始まった池の平遺跡群の発掘は、いわゆる「野尻湖方式」と呼ばれる住民参加型の調査で、先史時代の村史解明に向けて多大な成果を挙げています。こうした学術調査に対して、公共事業に先立つ記録保存を目的とした緊急発掘調査は、本遺跡が初めての事例となります。

標高890mを超える馬込遺跡では、縄文時代と中・近世の遺構・遺物が発見されました。縄文時代では、陥し穴を中心とする土坑が見つかっており、この場所が縄文人たちの狩猟域であったと考えられています。また、中・近世においても竪穴建物や土器などがみつかり、人々の活動した痕跡が残されていました。今回の調査によって得られた資料と情報が、今後、多方面で十分に活用されることを願ってやみません。

最後に、保護協議から本書刊行に至るまで、深いご理解とご指導、ご協力を賜りました長野県佐久地方事務所、八千穂村教育委員会、八千穂村誌編纂委員会ほか関係機関・関係者の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

平成17年3月11日

（財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

所長 小 沢 将 夫

例　言

1　本書は、長野県佐久地方事務所（以下「地方事務所」という）による広域営農団地農道整備事業佐久南部地区に先立ち、緊急発掘調査された南佐久郡八千穂村に所在する馬込遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　発掘調査及び整理作業・本書の印刷刊行業務は、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）が地方事務所から委託を受け、平成14年度～16年度に実施した。

3　本遺跡の調査概要は、すでに『長野県埋蔵文化財センター年報19・20』で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

4　本書で掲載した地図は、国土交通省国土地理院発行の地形図（1:25,000及び1:50,000）、八千穂村発行の八千穂村基本図（1:500）をもとに作成した。なお、今回は旧日本測地系に基づいた。

5　測量基準点設置及び単点測量等の測量業務は（株）アイシーに委託した。

6　石器の石材鑑定は、信州大学理学部地質学科原山智教授にお願いした。

7　地層観察については、野沢北高校の寺尾真純教諭と新海正博教諭にご指導いただいた。

8　本書は、市澤英利調査部長・平林彰調査第２課長の校閲のもと、桜井秀雄が執筆及び編集を行なった。

9　本書で報告した記録類及び出土遺物は、本書刊行後に八千穂村教育委員会へ移管する。

10　発掘調査及び報告書作成にあたり、次の諸氏にご指導・ご支援を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）

井出正義、岩崎春芳、臼田武正、奥水太仲、小林範昭、桜井栄雄、桜井利雄、桜井房之助、桜井義胤、島田恵子、新海正博、寺尾真純、原山智、藤森英二

凡　例

1　遺構実測図のスクリーントーン等の表現は下記の通りである。

地山

礫

2　本書に掲載した実測図および遺物写真は、原則として次の通りである。その他の場合は図版中のスケールを参照していただきたい。

竪穴状遺構実測図　1：40　土坑実測図　1：40　土器実測図　1：4　1：2

石器実測図　2：3　1：2　1：3　土器写真　1：2　石器写真　2：3　1：2　1：3

3　土層・遺物の色調は「新版　標準土色帖」による。

目　次

巻頭図版
序
例言・凡例
目次

第1章　序説
　第１節　保護協議から本調査に至るまで…… 1
　1　保護協議
　2　発掘届と発掘の指示
　3　受委託契約
　第２節　発掘作業…… 2
　1　発掘体制と準備
　2　調査範囲と調査区
　3　検出面の設定と遺構の精査
　4　記録の方法
　第３節　整理作業…… 5
　1　整理作業の体制
　2　遺構の確定
　3　遺物整理の方法
　4　図面と写真等の記録整理方法
　5　報告書の作成
第2章　遺跡の位置と環境
　第１節　遺跡の位置と地理的環境…… 7
　第２節　歴史的環境…… 8
第3章　調査結果
　第１節　遺跡の概観と調査の概要……13
　第２節　基礎土層……13
　第３節　遺構……20
　1　1号竪穴状遺構
　2　土坑
　第４節　遺物……23
　1　土器・陶磁器
　2　石器
第4章　まとめ……39
写真図版
報告書抄録

第１章　序説

第１節　保護協議から本調査に至るまで

１　保護協議

県教育委員会が平成13年7月4日付13教文第226号で地方事務所に対して行った平成14年度の公共事業照会に対して、地方事務所は広域営農団地農道整備事業佐久南部地区を計画している旨の回答を行った。この回答に対して、八千穂村教育委員会は当該事業地内に周知の埋蔵文化財包蔵地（馬込遺跡）があるため、その保護措置について県教育委員会を交えて協議を希望する旨の意見を寄せてきた。

県教育委員会は、平成14年5月10日に地方事務所、八千穂村教育委員会及び埋文センターを交えた保護協議を行い、事業の公共性から判断して遺跡の記録保存を行うこととした上で、次の事項について確認を行った。

・発掘調査は、地方事務所が埋文センターへ委託して行うこと。

・平成14・15年度に発掘作業、平成16年度に整理作業を行い、発掘調査報告書は平成16年度中に印刷刊行すること。

２　発掘届と発掘の指示

平成14年8月10日付14佐地土第510号で地方事務所長から通知のあった周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、県教育委員会教育長が同年10月16日付14教文第18-133号で、記録の作成のための発掘調査を埋文センターに委託の上実施する旨の通知を行ったことにより、広域営農団地農道整備事業佐久南部地区に係る八千穂村馬込遺跡の発掘調査を埋文センターが実施することが正式に決定した。

これを受けて、埋文センターでは平成14年8月26日付14長埋第3-16号および平成15年4月1日付15長埋第11-23号で県教育委員会あてに文化財保護法第57条に基づく発掘届を提出し、平成14年9月2日付14教文第4-17号および平成15年4月14日付15教文第8-23号で教育長から承諾を受けた。

３　受委託契約

地方事務所と埋文センターとの契約内容は次表のとおりである。

	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度
内　容	発掘作業 基礎整理作業	発掘作業 基礎整理作業	本格整理作業 報告書印刷刊行
期　間	平成 14 年 8 月 26 日から 平成 15 年 3 月 14 日まで	平成 15 年 9 月 1 日から 平成 16 年 3 月 19 日まで	平成 16 年 9 月 1 日から 平成 17 年 3 月 18 日まで
契約額	19,027,000円	23,607,000円	7,470,000円

第2節 発掘作業

1　発掘体制と準備

発掘作業の体制と期間、面積は次の通りである。

平成14年度

・体　制　所　　長：深瀬弘夫　副　所　長：原　聖　管理部長補佐：田中照幸

調 査 部 長：小林秀夫　調査第1課長：廣瀬昭弘

調査研究員：桜井秀雄、西島　力

発掘補助員：相澤勝寿、高見沢挙、宿岩恵美、黒沢美恵子、黒沢靖子、平林明子、佐久広域シルバー人材センター八千穂支所（桜井智恵子、小沢栄子、井出佐千雄、桜井利雄、小宮山操、渡辺ふみ子、畑二子、菊池春雄、佐藤タミ子、吉田敬子、日向チヨ、菊池勲）

・発掘期間　　平成15年9月2日～12月25日

・基礎整理期間　平成16年1月6日～2月28日

・面　積 4,000㎡　農道北側部分の1～4区（4,000㎡）の発掘調査を実施した。

調査日誌(抄)

9月2日(月)　発掘準備にはいる。
9月12日(木)　重機を稼動する。
9月25日(水)　本日より作業員従事開始。①区の検出作業を始める。
10月9日(水)　高橋秀一八千穂村長来訪。
10月15日(火)　②区の調査にはいる。
10月22日(火)　③区の調査にはいる。
11月1日(金)　③区にあたるそば畑の収穫が終わっていないため、本日で作業員従事を一時休止することにする。
11月5日(月)　調査研究員で進捗写真撮影、図面実測等を行う。
11月21日(木)　本日から③区の重機による表土剥ぎを始める。
11月26日(火)　本日から作業員従事を再開する。③区の検出作業を始める。
11月28日(木)　数cmの積雪を観測、雪かきをして調査を続行する。
12月9日(月)　積雪約30cmを記録する。
12月10日(火)　本日で作業員従事は終了する。
12月25日(水)　器材の撤収・搬出が完了し、本年度の調査を終了した。

平成15年度

・体　制　所　　長：深瀬弘夫　副　所　長：原　聖　管理部長補佐：上原　貞

調 査 部 長：市澤英利　調査第1課長：廣瀬昭弘

調査研究員：桜井秀雄、中野亮一

発掘補助員：平林明子、勝俣徳一、井上清、井上隆一、高橋弓子、佐久広域シルバー人材センター八千穂支所（桜井智恵子、小沢栄子、井出佐千雄、桜井利雄、小宮山操、渡辺ふみ子、畑二子、菊池春雄、吉田敬子、日向チヨ、菊池勲、小沢平三郎、桜井義胤、佐々木ハツノ、栗林正人、小沢邦夫、井出南津雄、古屋基二、古屋永、相馬くに子、井出百合江、篠原久子、佐藤みゆき、篠原弘子、高見沢信子）

・発掘期間　　平成15年9月1日～12月25日

・基礎整理期間　平成16年1月5日～3月19日

・面　積 10,000㎡　農道南側部分の5・6区（10,000㎡）の発掘調査を実施した。

調査日誌（抄）

9月1日(月)　本日より発掘準備にはいる。
9月16日(火)　本日より重機を稼動する。駐車場整備を行う。
9月17日(水)　重機により昨年度調査分の排土移動を開始する。
9月29日(月)　重機による表土剥ぎを⑤区から開始する。
10月2日(水)　本日より作業員従事を開始。⑤区の検出作業を行う。
10月3日(金)　佐々木定男八千穂村長来訪。
10月10日(金)　遺構外より土器片・石器が出土する。
10月31日(金)　⑥区の調査にはいる。
11月21日(金)　⑤区の残件であった部分の営農が終了し、本日から調査にはいる。
12月3日(木)　白田高校寺尾真純教諭・野沢北高校新海正博教諭に、遺跡のローム層と地形形成についての指導を受ける。
12月4日(木)　両的調査範囲から除外した南側面部について重機によりトレンチ調査を実施する。
12月5日(金)　ラジコンヘリによる空中撮影を実施する。
12月12日(金)　本日で作業員従事は終了する。
12月25日(木)　本日で器材等の撤収・搬出を完了し、すべての調査を終了した。

両年度とも発掘作業に際し、期間内における資料と機材の保管及び休憩施設として現場事務所を調査区内に設置した。表土剥ぎ、トレンチ掘削、排土移動等では大型機械（重機及びクローラーダンプ）をオペレーターとともに借り上げて用いている。

また、発掘期間中は、次の方々にご指導、ご協力をいただいた。(五十音順、敬称略)

井出正義、岩崎春芳、臼田武正、輿水太仲、小林範昭、桜井利雄、桜井房之助、桜井義胤、

島田恵子、新海正博、寺尾真純、藤森英二、八千穂村教育委員会

2　調査範囲と調査区

今回の調査範囲は、広域営農団地農道整備に伴う事業用地のうち、14,000㎡が対象となった。発掘調査は2ヵ年にわたって実施され、平成14年度は尾根状丘陵の頂部を東西に横切る農道を境とし、その北側部分4,000㎡の調査を、そして平成15年度には農道の南側部分10,000㎡の調査をそれぞれ行った。

調査範囲は、便宜的に１～６区に分けた。したがって、平成14年度には１～４区、平成15年度には５・６区の調査が行われたことになる。

また、また、平成15年度調査範囲の南斜面際は、調査前の現地踏査で原地形がかなり変わっていることが認められたため、トレンチ調査で対応することにした。この部分を南側斜面トレンチ部分と呼称したが、結局、遺構・遺物とも検出しなかった。

3　検出面の設定と遺構の精査

重機により耕作土・表土（Ⅰ層）および黒褐色土（Ⅱ層）を剥ぎ取り、ローム層（Ⅲ層）上面を検出面とした。２層は尾根頂部付近ではみられなかった。

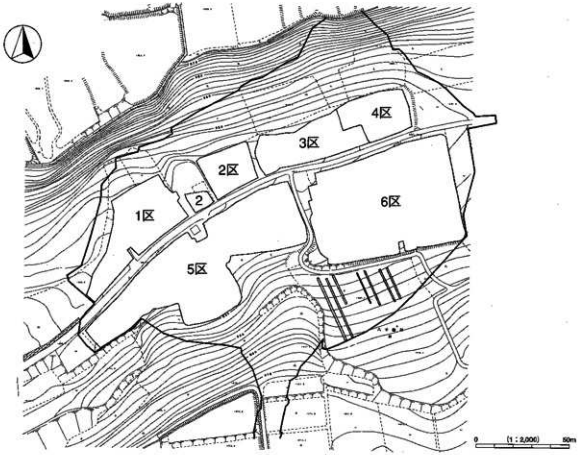
発掘補助員による遺構検出はこのローム層（Ⅲ層）の上面で行い、縄文、平安、中・近世の各時代の遺構、遺物を検出した。また５・６区の尾根頂部の一部では、営農の影響によりⅢ層類似の撹乱土がⅢ層直上に堆積していた箇所もあった。

竪穴状遺構は土層観察用のベルトを設定し、土層を観察しつつ覆土を床面まで掘り下げる方法、土坑については基本的に覆土を二分割して掘り下げる方法を採用した。なお、土坑のうち陥し穴と考えられるものについては、坑底ピットの存在を坑底精査のみで検出することは困難と判断し、覆土完掘後に重機によって陥し穴全体を断ち割り、坑底ピットの把握に努めることとした。

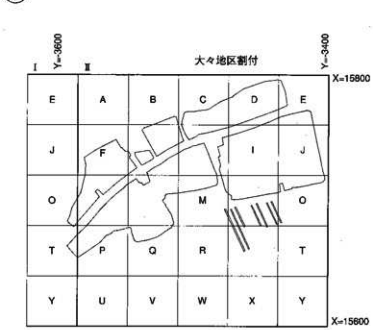
4　記録の方法

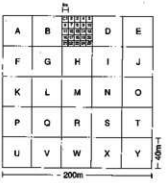
（1）遺跡の名称と記号

遺跡名は、八千穂村教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている「馬込遺跡」とした。発掘調査及び整理作業の便宜上、大文字アルファベット３文字で表記される遺跡記号「ＤＭＥ」を用いている。３文字の１



第1図　事業用地と調査範囲





大・中地区割付

第2図　地区割付・グリッド

番目は長野県内を９地区に分けた地区記号で臼田町が該当する「Ｄ」、２文字目は遺跡をローマ字表記した「ＭＡＧＯＭＥ」の「ＭＥ」とした。この記号は本遺跡に関する図面、写真、遺物及びその整理箱等すべての資料で使用している。

（２）調査区（グリッド）の設定と略称

発掘調査に当たって調査区（グリッド）を設定している。調査対象地に国土地理院の平面直角座標系の原点第Ⅷ系（長野県はⅧ系、Ｘ＝0,000、Ｙ＝0,000）を基点に200×200ｍの区画を設定し、これを大々地区とした。大々地区はローマ数字を用いた。

大々地区内を25区画（40×40ｍ）に分割し大地区とし、さらに大地区を25区画（８×８ｍ）に分割し中地区を設定した。測量基準杭は中地区のメッシュを基本とし、業者委託して設定した。調査で検出された遺構の記録及び遺物の取り上げは、遺構の個別名のほかは中地区の基準杭、グリッド名称を用いた。また一部業者委託の単点測量による作図も併用した。

（３）遺構の名称と遺構記号

調査では、遺跡記号と同様に遺構についても記録と遺物の注記等の便宜を図るための記号を用いている。この記号は基本的に検出時に決定するため、主として平面形や分布の特徴を指標としており、必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。遺構番号は、時代等に関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦、付けたものは原則として遺構記号・遺構番号の変更はしていない。このため番号に欠番がある。

本書で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

ＳＢ：方形、円形、楕円形の掘り込み。竪穴住居址、竪穴状遺構。

ＳＫ：ＳＢより平面形が小さい掘り込み。土坑、貯蔵穴、井戸等。

（４）測量と写真撮影

遺構の測量は簡易遣り方測量により、調査研究員及びその指導のもとに発掘補助員が行った。遺構測量の縮尺は、個別遺構図と土層図が１：20、トレンチ掘削地点、土層断面記録地点は、全体図や地形図とともに業者委託の単点測量で作成した。

発掘中の遺構等の撮影は、マミヤＲＢ（６×７）とニコンＦＭ２（35mm）を併用し、ともにモノクロプリント（ネオパン）とカラーリバーサル（フジクローム）で撮影した。撮影はすべて調査研究員が行い、現像と焼付は業者委託とした。空中写真は業者委託により2ヶ年とも１回づつ実施した。

第３節　整理作業

１　整理作業の体制

整理作業の体制と期間は次の通りである。

・体　制　所　　長：小沢将夫　副所長：藤岡俊文　管理部長補佐：上原　貞

調査部長：市澤英利　調査第２課長：平林　彰　調査研究員：桜井秀雄、河西克造

整理補助員：市川ちず子、今井博子、臼田知子、大林久美子、小根山貞子、加藤周子、黒岩美枝、倉石志のぶ、近藤朋子、斎藤いづみ、高橋康子、日向冨美子、矢島美雪、柳原澄子

・期　間　平成16年9月1日～3月18日

信州大学理学部地質学科原山智教授に石器鑑定をお願いした。

2 遺構の確定

遺構の記号及び番号は、基本的に発掘作業時に認定したものを踏襲している。基礎整理では、遺構の位置・規模・形状・時期・属性などの再検討を行い、その結果は遺構台帳（一覧表）を作成・記入し、本格整理の際に活用した。なお、遺構と認定できないと判断した落ち込みが3基（ＳＫ３・４・14）と焼土１ヶ所があり、これは欠番とした。

3 遺物整理の方法

遺物の洗浄・注記は原則として現場事務所で行った。整理作業では接合・復元を行い、報告書掲載遺物を抽出し、台帳を作成した。抽出に当たっては、出土遺物数が少ないため、すべての遺物の観察を行い、図化可能なものを選び出し、図化できたものはすべて掲載した。台帳をもとに掲載遺物の実測、拓本、撮影を行い、図版（アナログ）を作成した。報告書作成と同時に遺物の収納作業も行った。

4 図面と写真等の記録整理方法

図面は、現場終了後の基礎整理時に記載内容や図面相互を点検・修正し、本格整理にはいってトレースもしくは図版作成の素図となる第２原図を遺構単位に作成した。さらに個々の図面に番号を付け、掲載遺構を記載した図面台帳を作成した。この台帳が報告書作成時もしくは収納時おいて図面の検索台帳の役割を果たすものである。

写真（モノクロ・リバーサル）は、基本的に撮影順にファイルに整理した。ただし、35ミリカラーリバーサルは、整理作業の関係上、遺構単位に並び替えて整理してある。現場で記録した撮影台帳とは別に、整理時に写真台帳を作成した。

その他の整理は、上記の他に測量業務委託の成果簿、空中写真ネガ、調査日誌、整理日誌、現場で作成した遺構・写真台帳、遺構所見カードなどがある。これら諸記録も整理・収納した。

5 報告書の作成

今回の調査では検出遺構は竪穴状遺構1基を除き、他はすべて土坑であり、総数104基を数える。遺物はすべて遺構外出土であったが、縄文時代、平安時代、中・近世の各時代のものが少量ながら出土した。このように遺跡の立地する丘陵一帯には決して多くはないが、各時代の人間の活動の痕跡がうかがえる。遺跡周辺のみならず、八千穂村での発掘調査はその事例が少ないため、可能な限り資料化し報告書に掲載するように努めた。

整理日誌(抄)

平成16年9月1日	整理作業開始。
9月～	遺物接合・復元。掲載遺物抽出。
10月～	遺物実測・拓本・トレース。
11～12月	第２原図チェック、遺構図・全体図・土層図・遺跡分布図等トレース。遺構・遺物図版組。原稿執筆。
平成17年1月～2月	図版作成。原稿執筆。遺物写真撮影。
1月31日	報告書入札。
2月～3月	報告書校正。図面・遺物等記録類の整理・収納。
3月11日	発掘調査報告書刊行。

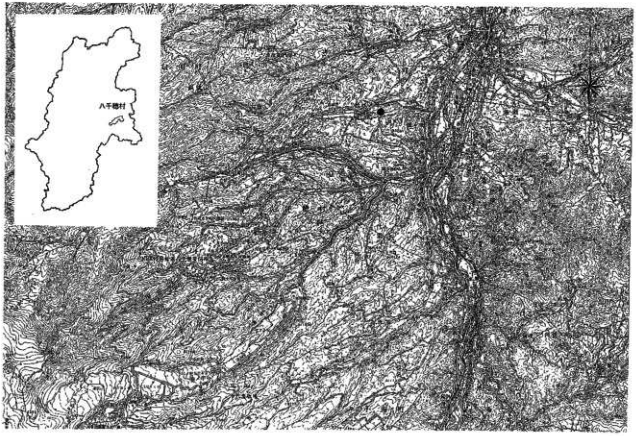
第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

馬込遺跡は長野県南佐久郡八千穂村大字畑に所在し、佐口区に属する。ＪＲ八千穂駅から千曲川を渡り東方へ２㎞向かうと国道141号線「畑」の信号機がみえる。この信号機を左折し、急坂の段丘を登りきると一転して水田がひろがってくるが、そこが佐口区である。

八千穂村の地形は千曲川を境に、川東地域、川西地域、千曲川沿岸地域の３つに分けられる（八千穂村誌刊行会2001）。川東地域は関東山地の秩父帯にあたり、約５・６千年前の地層・岩石から成っている。川西地域は約130万年前から火山活動が始まった八ヶ岳火山列の噴出物で覆われている。千曲川沿岸地域は千曲川が作り出した沖積地と段丘地形で形成されている。

馬込遺跡は、千曲川沿岸地域にみられる段丘上の、やせた尾根状に残る丘陵の頂部に立地し、標高は約891m～895m前後をはかる。尾根の比高差は約20mにも及んでおり、馬込遺跡の所在するこの尾根状丘陵のことを地元では、「向山」あるいは「中原」と呼んでいる（註１）。



第３図　馬込遺跡位置

0　(1:100,000)　2,500m

第2節　歴史的環境

千曲川左岸の河岸段丘上の台地には、八ヶ岳東麓から伸びる丘陵が幾筋もみられるが、本遺跡をはじめその丘陵上に立地する遺跡が多い。ここでは本遺跡の所在する八千穂村畑地区を中心に佐久町の一部を含めた周辺地域の歴史を概観したい。

旧石器時代

八ヶ岳北東麓の八千穂高原には著名な池の平遺跡群があるが、標高800～900m前後をはかる千曲川左岸の河岸段丘上にはいまだ遺跡の発見はみられない。なお千曲川右岸でも関谷遺跡（43）など数遺跡を数えるにすぎない。

縄文時代

最も多くの遺跡がみられる時代である。千曲川右岸の崎田原遺跡（37）では旧石器時代終末から縄文時代草創期における安山岩製の御子柴型尖頭器が採集されている。

早期末～前期初頭においては反り峯遺跡（20）で、また続く前期前半では宮の入遺跡（32）、ムジナ沢遺跡（33）、石堂遺跡（34）など、この時期になると千曲川左岸の河岸段丘上にも遺跡が認められてくる。千曲川左岸でも崎田原遺跡（37）、関谷遺跡（43）、唐沢遺跡（50）などで土器片が認められている。前期後半の資料は少なく、細久保遺跡（36）や千ヶ日向遺跡（40）で土器片がわずかにみられるにすぎない。

中期にはいると、前葉の遺跡は比較的少ないが、千曲川左岸の河岸段丘上では中葉以降遺跡数が増大してくる。なかでも後葉の遺跡が多く、佐久西小学校裏遺跡（10）や上野月夜原遺跡（18）などが注目される。佐久西小学校裏遺跡（10）では昭和57・58年の発掘調査により中期後半の住居跡1軒がみつかっている。また北沢地籍では全長223cmの日本一大きい石棒が採集されているが、これは佐久西小学校裏遺跡から北沢川に崩落したのではないかと推測される。

一方、千曲川右岸でも封地遺跡（28）、崎田原遺跡（37）などがみられている。崎田原遺跡は八幡一郎氏の『南佐久郡の考古学的調査』（八幡1925）で大きく取り上げられており、その豊富な縄文中期土器群は「崎田相」として表現されている。戦後、開田工事計画が遺跡の中心地に及ぶことが判明したため、当時の穂積村教育委員会が南佐久郡志編纂会の協力を受けて緊急発掘調査を実施することとなった。発掘調査は昭和29年12月と昭和30年11月の2回にわたり行われた。検出された遺構としては縄文時代中期の住居跡1軒や炉跡などがあり、遺物には縄文時代中期から後期の土器・石器などが大量にみられている（五十嵐1955a・b・c、1958）。中期中葉～後葉が遺跡の中心である。

後晩期になると遺跡数は激減してくるが、宮の本遺跡（7）では後期中葉の敷石住居跡1軒と配石遺構が発掘調査により発見されている（佐久町教委1979）。また佐久西小学校裏遺跡では後期の墓坑群や土器廃棄場などが検出されている（佐久町教委1984・2001）。上野月夜原遺跡（18）では敷石住居跡が存在したとの記録もあるようだが、詳細は不明である（八千穂村誌刊行会2003）。

千曲川沿岸の沖積地上に立地する封地遺跡では平成15年度の発掘調査により、後期を中心とするおびただしい土器・石器等が出土したが、一部には晩期前半の土器も含まれている（註1）。沖積地という他の縄文遺跡の立地とは大きく異なっている点からも注目される遺跡である。

弥生時代

遺跡の減少が顕著となる。千曲川左岸の河岸段丘上では北沢遺跡（4）、宮の本遺跡（7）、佐久西小学校裏遺跡（10）など後期の遺跡が認められる程度である。竪穴住居跡の調査例はいまだなく、佐久西小学校裏遺跡で集落の存在する可能性が指摘されている他は、後期の土器片がごく少量認められるだけである。こ

の佐久西小学校裏遺跡と千曲川右岸の館遺跡を結ぶ線が南佐久郡における弥生稲作文化の南限であるといえる（南佐久郡誌刊行会1998）。

古墳・奈良・平安時代

南佐久郡内における最南端の古墳は千曲川左岸地域では佐久町高野町に所在する塚畑古墳（4）、右岸地域では佐久町曽原の曽原古墳及び岩水の舟久保20号古墳であり、八千穂村内およびそれ以南では現在のところ古墳は発見されていない。こうした古墳の分布は、前代の弥生稲作文化の南限点とほぼ一致する。

『和名類聚抄』には佐久郡内の郷について、美理・大村・大井・刑部・茂里・小沼・青沼・余戸の8郷が記されている（註2）。このうち余戸郷とは10戸以上50戸未満の小郷であり、佐久郡においては比定地が不明であるが、井出正義氏は、佐久町の一部、八千穂村・小海町・南相木村・北相木村・南牧村・川上村の広大な千曲川上流地域に余戸郷が存在した可能性を指摘している（八千穂村誌刊行会2003）。

縄文時代遺跡が多くみられた千曲川左岸の河岸段丘の上に再び人間の活動の痕跡が刻まれてくるのは平安時代である。発掘調査により検出された遺構としては、佐久西小学校裏遺跡で平安時代の竪穴住居跡2軒が、小山寺窪遺跡（14）で平安時代の竪穴住居跡が2軒、宮の本遺跡で土坑1基などが確認されている。他の多くは土師器片・須恵器片等の出土・採集である。破片資料が多いため詳細な時期決定の困難なものが多いが、大半は平安時代のものとみられる。そのなかで北沢遺跡（5）から採集された緑釉陶器は注目される。また、現在は失われてしまっているが、宮の入地籍からはかつて直刀と蕨手刀が出土したということである。勝見沢遺跡（31）では昭和15年頃の開田工事の際に土師器などとともに平安時代末期頃の八稜鏡が採集されている。

中世

千曲川左岸地域は伴野荘に属していた。伴野荘は伴野氏没落後には北条氏の所領に分割されたが、鎌倉幕府が倒れると、後醍醐天皇は京都大徳寺に寄進した。大徳寺文書によると、「畑物村」、「保間」、「大石」、「岩郡」等の記載があり、井出正義氏は、「畑物村」は現在の畑地区を中心とする村、「保間」は「本間」のことで現在の千代里地区を中心とする地域、「岩郡」は「八都」のことではないかと推定している。

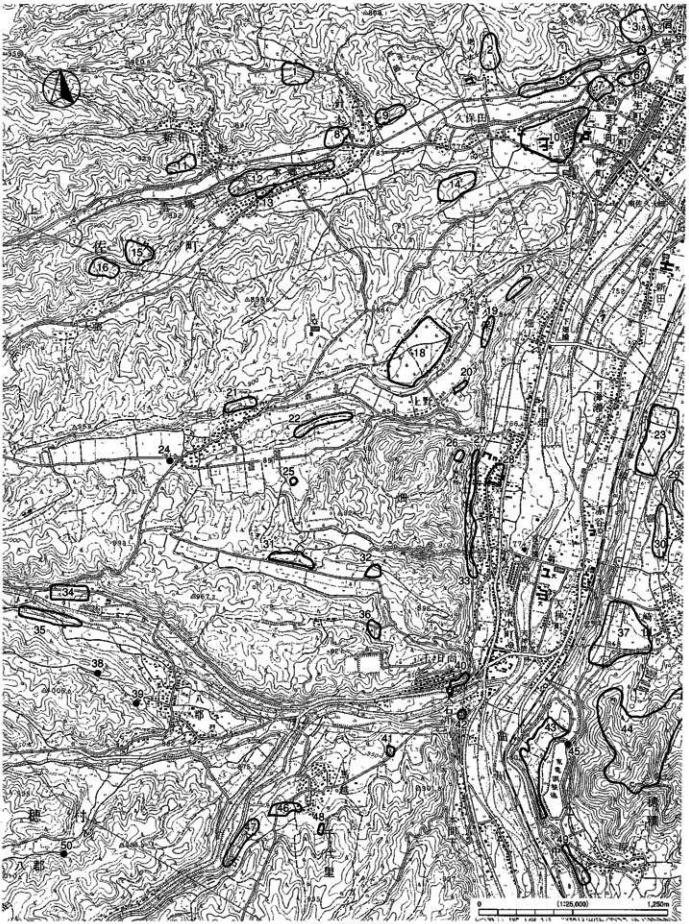
山城には、高野城跡（6）、福田城（12）、下畑下の城跡（17）、下畑城跡（19）、佐口城跡（21）、稚現山砦跡（26）、花岡烽火台遺跡（29）、蓮城跡（35）、大石川烽火台跡（42）、蟻城跡（44）、馬越城跡（47）が存在している。武田氏に関係するものばかりではなく、武田氏侵攻以前の地侍たちのものとみられる山城も少なくないようである（井出ほか1997）。また中山遺跡（30）では南佐久郡内で多く認められる地下式坑が6基みつかっている。この地下式坑は山城と密接な関係をもち、有事の際に逃げ込む避難所であると考えられている（南佐久郡誌刊行会1998）。小山寺窪遺跡（14）では竪穴建物址1軒と鎌倉時代から室町時代に至る100余基の五輪塔が発掘調査され、古寺の存在も推測されている（佐久町教委2002）。五輪塔は比較的多く認められ、中畑十二明神には一石五輪塔と石卒塔婆がある。室町時代には中畑村に沢入守という豪族がいたとの伝承があり、関係が指摘されている（八千穂村教委1982）。この地穴原地籍や蟻城周辺でも多くの五輪塔が認められている。

近世

本遺跡の周辺の旧村には、上畑・中畑・下畑・大窪・八都・馬越・本間・崎田・稚口（以上八千穂村）、上村・高野町村・海瀬村（以上佐久町）があった。

佐久甲州街道は中山道と甲州街道を結ぶものとして早くから開けていた。高野町と上畑に宿場が置かれた。清水町には一里塚があったとされるが、現在では残っておらず、村指定自然記念物になっている榎がそのおもかげをしのぶだけである。

寛保2年（1742年）8月には「戌の満水」と呼ばれる千曲川の大洪水が発生し、特に上畑村に大災害をも



第4図　周辺の遺跡

	遺跡名	町村名	所在地	時代							備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	
1	たつまち保東遺跡	佐久町	上区・針ノ本沢		○			○			
2	瀧明遺跡	佐久町	高野町・北沢		○			○			平成6年試掘調査
3	栗窟遺跡	佐久町	高野町・栗窟					○			
4	塚畑古墳	佐久町	高野町・北沢				○	○			
5	北沢遺跡	佐久町	高野町・北沢		○	○		○			
6	高野城跡	佐久町	高野町・相生						○		
7	宮の本遺跡	佐久町	高野町・宮の本		○	○	○	○			昭和54年発掘調査
8	下影遺跡	佐久町	上区・下影		○			○			
9	施餓鬼畑遺跡	佐久町	上区・針ノ本沢		○			○			
10	佐久西小学校裏遺跡	佐久町	高野町・三本木		○	○	○	○			昭和57・58年発掘調査
11	影遺跡	佐久町	上区・上影		○			○			
12	福田城跡	佐久町	上区・本郷						○		
13	本郷遺跡	佐久町	上区・本郷		○						
14	小山寺窟遺跡	佐久町	高野町・小山					○	○		平成14年発掘調査
15	寺久保遺跡	佐久町	上区・寺久保		○			○	○		
16	生ぶろ遺跡	佐久町	上区・大張		○			○	○		
17	下畑下の城跡	八千穂村	畑・下畑						○		
18	上野月夜原遺跡	八千穂村	畑・上野		○			○			
19	下畑城跡	八千穂村	畑・下畑						○		
20	反り峯遺跡	八千穂村	畑・上野		○						
21	佐口城跡	八千穂村	畑・佐口		○						
22	馬込遺跡	八千穂村	畑・佐口		○			○	○	○	平成14・15年発掘調査
23	上ノ原遺跡	佐久町	海瀬・上ノ原		○			○			平成10年発掘調査
24	佐口遺跡	八千穂村	畑・佐口		○						正確な位置不明
25	南平遺跡	八千穂村	畑・佐口		○			○			
26	櫛渕山砦跡	八千穂村	畑・上畑						○		
27	竹の下遺跡	八千穂村	畑・上畑		○			○			上畑遺跡群
28	封地遺跡	八千穂村	畑・上畑		○			○			
29	花岡烽火台遺跡	佐久町	海瀬・花岡						○		平成15年発掘調査
30	中山遺跡	佐久町	海瀬・花岡		○				○		昭和48年、平成2年発掘調査
31	勝見沢遺跡	八千穂村	余地・本郷					○			
32	宮の入遺跡	八千穂村	畑・上畑		○			○			
33	ムジナ沢遺跡	八千穂村	畑・上畑		○	○		○			上畑遺跡群
34	石堂遺跡	八千穂村	八郡・石堂		○				○		
35	蓮城跡	八千穂村	八郡						○		
36	縄久保遺跡	八千穂村	畑・上畑		○						
37	崎田原遺跡	八千穂村	穂積・崎田		○	○		○			昭和29・30年発掘調査
38	堂屋敷遺跡	八千穂村	八郡					○			正確な位置不明
39	八郡遺跡	八千穂村	八郡		○						正確な位置不明
40	チッ日向遺跡	八千穂村	畑・チッ日向		○						
41	中原遺跡	八千穂村	千代里・馬越		○						
42	大石川烽火台跡	八千穂村	千代里・大石川						○		
43	岡谷遺跡	八千穂村	穂積・岡谷	○	○			○			
44	鎌城跡	八千穂村	穂積・穴原ほか						○		
45	岡谷東遺跡	八千穂村	穂積・岡谷		○			○			
46	古屋敷遺跡	八千穂村	千代里・馬越		○						
47	馬越城跡	八千穂村	千代里・馬越						○		
48	向窟遺跡	八千穂村	千代里・馬越		○						
49	穴原遺跡	八千穂村	穂積・穴原		○						
50	唐沢遺跡	八千穂村	八郡・唐沢		○			○			

表1　周辺の遺跡

たらした。流出家屋は約8割にあたる140軒、流死者は約四割にあたる248人に及んだ。この大災害が当地に与えた影響は大きく、お盆に先駆けて8月1日に墓掃除・墓参りをする佐久地方に今も残る独自の文化はこの「戌の満水」を契機にしたものといわれている（信濃毎日新聞社出版部2002）。

近・現代

明治政府は中央集権的な行政制度を目指し合併を推進した。こうした動きの中で上畑村、中畑村、下畑村、大窪村の4か村が合併して畑村となった。明治21年には市町村制の公布がなされ、県は戸数300戸以上を目標とした町村合併を進めた。この明治の大合併において、畑村と八部村は合併して畑八村となった。昭和31年に穂積村と畑八村が合併し、新しい村名は八千穂村と定められた。一方、上村・高野町は宿岩村とともに明治の合併で栄村となり、その後昭和30年に海瀬村と合併して佐久町となった。

そして平成17年3月20日をもって、八千穂村と佐久町は合併して佐久穂町となることが決まっている。

註

1　八千穂村教育委員会小林範昭氏のご教示による。

2　『和名類聚抄』においては佐久郡の郷名の訓読は記されていないため、郷名の読み方は不明である。

引用参考文献

五十嵐幹雄1955a「縄文中期時代の穴居跡　発掘調査報告書」『穂積村公民館報』、穂積村公民館

五十嵐幹雄1955b「縄文中期の崎田遺跡—第二次発掘さる—」『穂積村公民館報』、穂積村公民館

五十嵐幹雄1955c「長野県南佐久郡穂積村崎田原遺跡調査概報」『信濃』7巻4号

五十嵐幹雄1958「長野県南佐久郡八千穂村崎田原遺跡第二次調査概報」『信濃』10巻2号

井出正義1969『八千穂村の歴史・第2集　考古学編』八千穂村教育委員会

井出正義1968『八千穂村の歴史・第1集』八千穂村教育委員会

井出正義・臼田都雄・小渕武一・木内寛『佐久の城』郷土出版社

佐久市志刊行会1995『佐久市志　歴史編1　原始古代』

佐久町教育委員会1974『宮の本遺跡』

佐久町教育委員会1979『佐久西小学校裏遺跡』

佐久町教育委員会2001『佐久西小学校裏遺跡』

佐久町教育委員会1991『佐久町の文化財』

佐久町教育委員会1991『中山遺跡』

佐久町教育委員会1996『花岡城跡』

信濃毎日新聞社出版部2002『「戌の満水」を歩く』

南佐久郡誌刊行会1998『南佐久郡誌　考古編』

八千穂村教育委員会1982『八千穂村の文化財』

八千穂村誌刊行会2003　『八千穂村誌　第四巻　歴史編』

八千穂村誌刊行会2001　『八千穂村誌　第二巻　自然編』

八千穂村教育委員会1971・1995『池の平遺跡群の調査—塩くれ場地点・トリデロック地点・湧水地点の調査報告—』

八千穂村池の平遺跡発掘調査団1984『池の平遺跡—八千穂村池の平遺跡発掘調査概報—』

八千穂村池の平遺跡発掘調査団1986『池の平遺跡群—八千穂村大反遺跡・塩くれ場遺跡の尖頭器文化—』

八千穂村教育委員会1996『池の平遺跡群—八千穂村駒出池遺跡の尖頭器文化—』

八幡一郎1928『南佐久郡の考古学的調査』

第３章　調査結果

第１節　遺跡の概観と調査の概要

馬込遺跡は、長野県南佐久郡八千穂村佐口区に所在し、地番は大字畑4478番地ほかにあたる。

遺跡が周知されたのは、八千穂村教育委員会が主体となり平成８年度から実施された村内の遺跡分布調査においてであり、新たに発見された14遺跡のひとつである。この分布調査において馬込遺跡からは、縄文時代の土器片や石鏃をはじめとする石器、平安時代の土器片、中世の土器片等が採集されている。これらの遺物については八千穂村教育委員会のご配慮により本書に掲載した。

また、今回の調査範囲の周辺から採集された遺物も少なくなかったようであり、そのうち桜井利雄氏所蔵の石臼と岩崎春芳氏所蔵の打製石斧の報告について両氏より快諾いただいた。

馬込遺跡は、地元で「向山」あるいは「中原」と呼ばれる尾根状丘陵の頂部を中心に広く展開している。今回の調査範囲は、広域営農団地農道整備に伴う事業用地のうち、14,000㎡が対象となった。発掘調査は２か年にわたって実施され、平成14年度は尾根状丘陵の頂部を東西に横切る農道を境とし、その北側部分4,000㎡の調査を、そして平成15年度には農道の南側部分10,000㎡の調査をそれぞれ行った。

調査範囲は、便宜的に１～６区の６地区に分けた。したがって、平成14年度には１～４区の、平成15年度には５・６区の調査が行われたことになる。

また、平成15年度調査範囲の南斜面際に関しては、もともとの地形が営農によりかなり変わっていることが認められたため、トレンチ調査で対応することにした。この部分については、南側斜面トレンチ部分と呼称したが、遺構・遺物とも検出されなかった。

遺構は竪穴状遺構１軒、土坑104基を検出した。土坑のうち５基は陥し穴である。出土した遺物は僅少であったが、縄文時代土器片・石器、平安時代土器片、中世土器（内耳鍋片・陶器片）、近世陶磁器片が認められている。

第２節　基本土層

本遺跡の立地する尾根状丘陵は八ヶ岳起源を主体とするローム層で覆われており、地山を形成している。このローム層については、臼田高校寺尾真純教諭（現 野沢北高校）と野沢北高校新海正博教諭に現地でご指導をいただき、土層の観察を行った。以下に述べる基本土層の分層および注記に関しては、両氏の多大なるご教示の賜物であるが、文責は執筆者にある。

ここであげた基本土層は、１区の尾根頂部付近において重機による深掘りトレンチを入れた箇所のものである。ちなみに、土壌学上でも馬込遺跡の所在する佐口区は有名であり、長野県土壌統名のひとつには「佐口」という名称があり、佐口を代表地とするものである。

Ⅰ層は、耕作土・表土である。

Ⅱ層は黒褐色（7.5YR3/2）土。粒子細かくサラサラしている。本層のみられない個所も多い。とりわけ尾根頂部ではみられない。

Ⅲ層は、褐色（10YR4/6）の粘土質土で、φ２～３cm程の黒曜石岩片がまばらにはいる。

Ⅳ層は、黄褐色（10YR5/6）の粘土質土で、デカパミが混じる。2.5万年～３万年前頃の佐久ローム層にあたる。

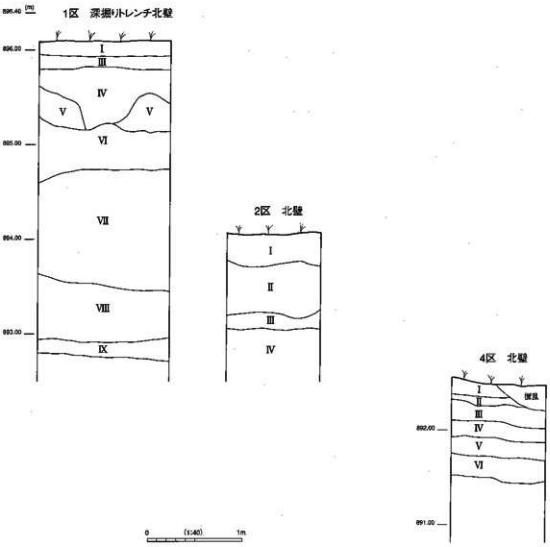
Ⅴ層は、褐色（10YR4/4）の粘土質土だが、粘性はそれほど強くない。２層と同程度の大きさのパミス（軽石）をわずかに含む。

Ⅵ層は褐色（10YR4/4）の粘土質土で、ホクホクしている。クラックが認められ、植生の跡が想定される。以上の３～６は新規（後期）ロームである。

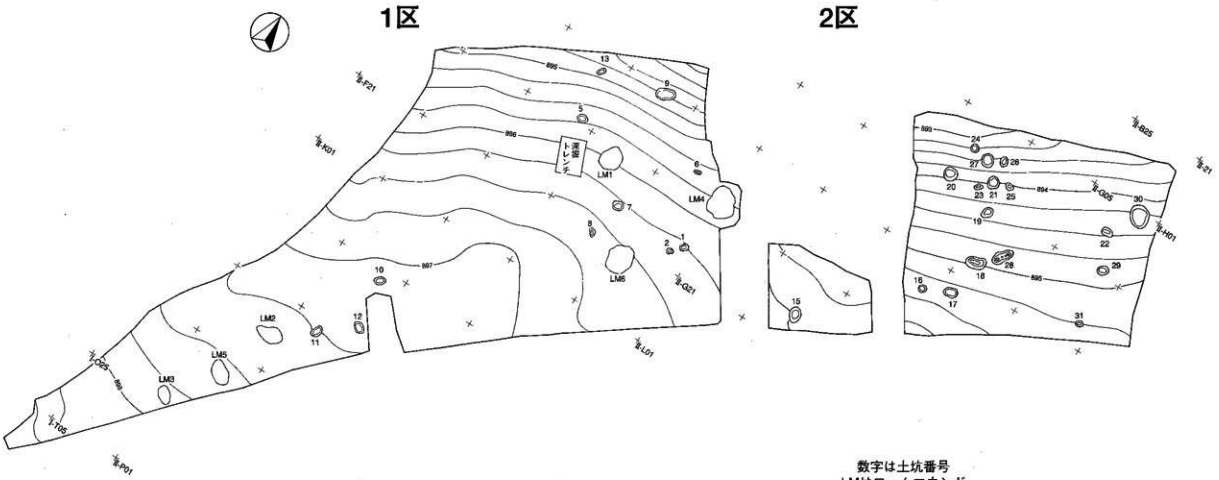
Ⅶ層は、褐色（7.5YR4/3）の粘土質土であり、粘土化進んでいる。しまりが強く、粘性が大きい。黒雲母（Biotite）含む。火山礫（茶褐色・φ５cm程度）が散る。

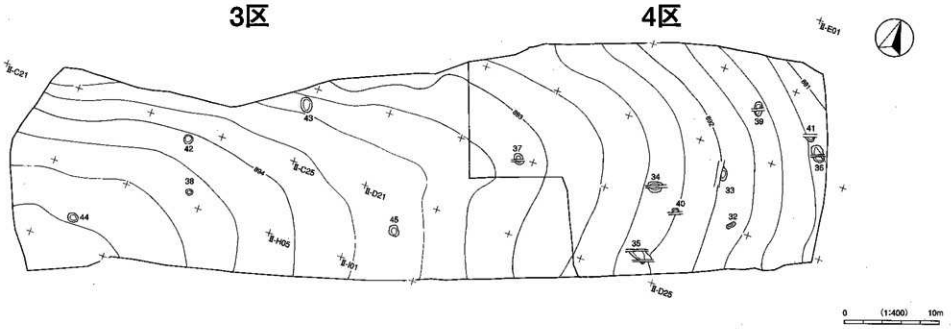
Ⅷ層は、にぶい黄褐色（10YR5/4）の粘土質土であり、白色化したパミスが散る。酸性が強い。

Ⅸ層は、にぶい黄褐色（10YR5/4）の粘土質土であり、粘性が大きい。赤色スコリア層に近いものがある。７～９は中期ローム（広瀬ローム層）であり、12～3万年前以前のものととらえられる。



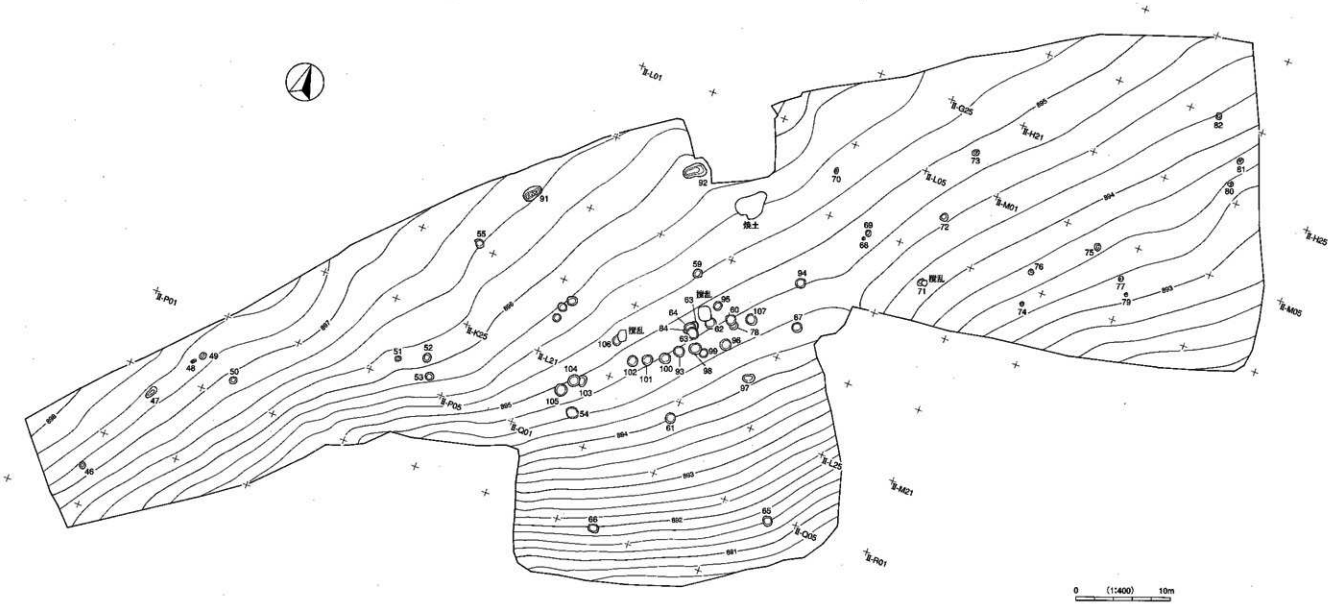
第５図　基本土層


1区
2区
遺構トレンチ
LM1
LM2
LM3
LM4
LM5
LM6
数字は土坑番号
LMはロームマウンド


3区
4区
0 (1:400) 10m

第6図　遺構配置図(1)

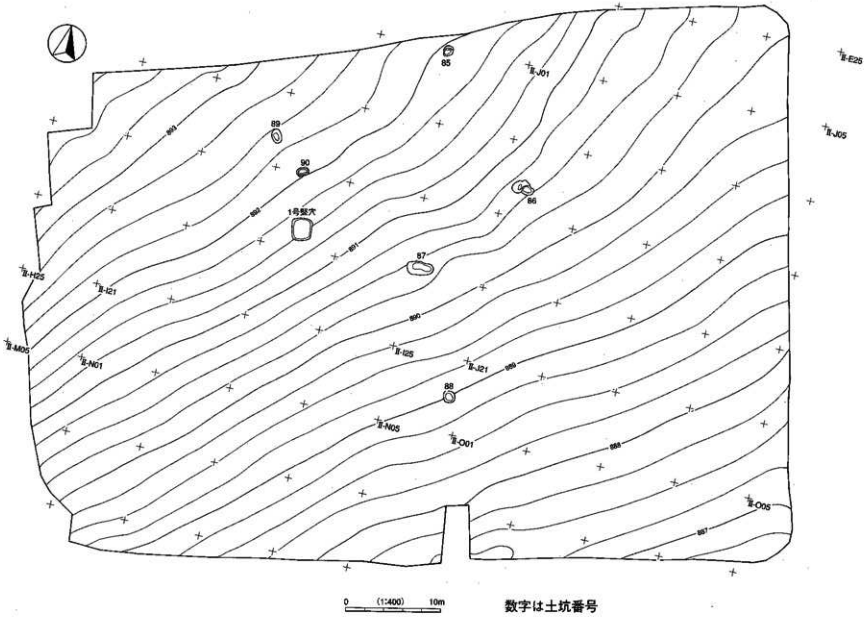
5区



数字は土坑番号

第7図　遺構配置図(2)

6区



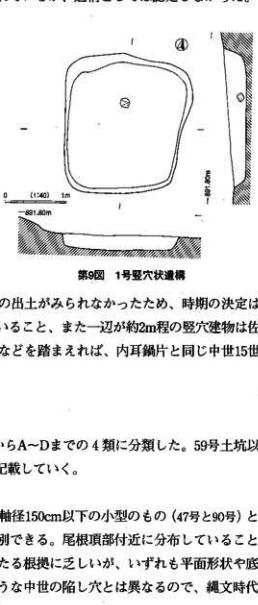
第8図 遺構配置図(3)

第3節　遺構

検出された遺構は竪穴状遺構1基、土坑104基である。すべてⅢ層上面で検出した。また風倒木痕と考えられるロームマウンド6ヶ所と焼土跡1ヶ所が確認されているが、遺構としては認定しなかった。

1　1号竪穴状遺構（SB01）

5区のⅡ-I-13グリッドに位置する。重複関係はない。ほぼ南北に主軸をもち、230×210cmの規模で、隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約30cmを測る。覆土は黒褐色（10YR3/1）土の単層であり、しまりがよく粘性も強い。中央やや北寄りの床面直上から安山岩質の礫が1点認められた。加工された痕はみられない自然礫である。床面はしまっている。遺物は出土しなかった。



第9図　1号竪穴状遺構

柱穴は検出されなかったが、床面がしまっていること、ほぼ南北の主軸をもつこと、隅丸方形を呈することから、竪穴建物跡の可能性が高いと考える。遺物の出土がみられなかったため、時期の決定は難しいが、周辺からは中世の内耳鍋片が少なからず出土していること、また一辺が約2m程の竪穴建物は佐久市金井城跡・大井城跡など中世に多く確認されていることなどを踏まえれば、内耳鍋片と同じ中世15世紀後半～16世紀代の所産である可能性が考えられる。

2　土坑

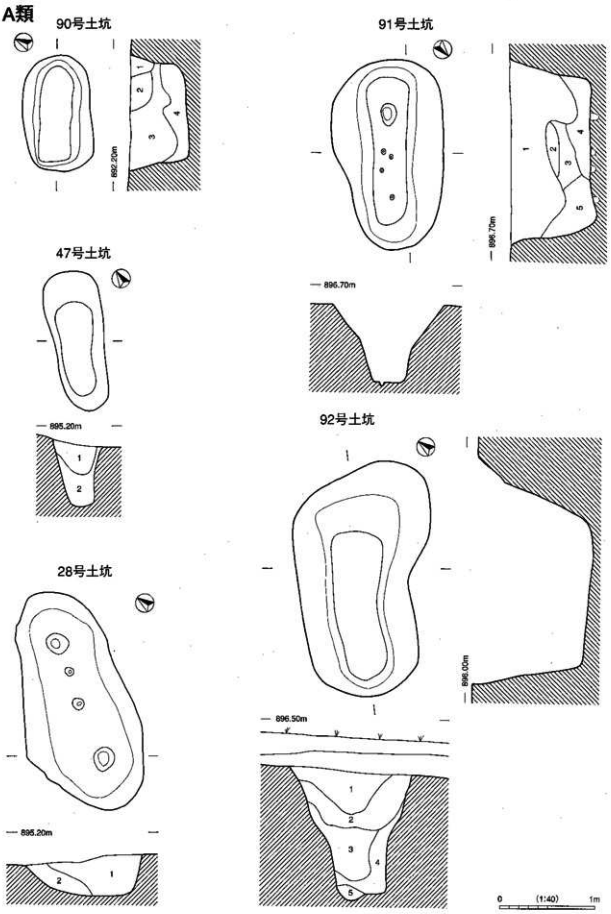
土坑は調査区全体で104基を検出した。形態等の特徴からA～Dまでの4類に分類した。59号土坑以外では遺物の出土をみない。以下、それぞれ代表的な土坑を記載していく。

A類　陥し穴と考えられる土坑（5基）

28号・47号・90号・91号・92号土坑があてはまる。長軸径150cm以下の小型のもの（47号と90号）と、長軸径200～250cm程の大型のもの（28号・91号・92号）に大別できる。尾根頂部付近に分布していることが理解できる。時期については遺物の出土は認められず、確たる根拠に乏しいが、いずれも平面形状や底面ピットの断面形態等が諏訪郡原村南平遺跡で確認されたような中世の陥し穴とは異なるので、縄文時代の所産であると考える（『南平遺跡発掘調査概報』原村教育委員会 1998）。

28号土坑（SK28）：2区のⅡ-G-9グリッドに位置する。2区の尾根頂部から北斜面へ向かう地点に立地する。長径245cm×短径125cm×深さ47cmの規模をはかり、楕円形を呈する。重複関係はない。覆土は2層に分けられた。1層はしまりの弱い黒褐色（7.5YR3/1）土である。2層はしまりのあるにぶい黄褐色（10YR4/3）土で、これに1層の土がブロックで混じる。底面には4ヶのピットが認められている。底面にみられる4ヶのピットを逆茂木痕と判断し、陥し穴と考える。

47号土坑（SK47）：5区のⅡ-P-6グリッドに位置する。重複関係はない。150×60cmの規模をはかり、楕円形を呈する。検出面からの深さは65cmを測る。覆土は2層に分けられる。1層はしまりのやや悪い黒褐色（10YR2/3）土であり、2層はしまりのよい褐色（10YR4/4）土である。底面にはピットなどの特別な施設は認められなかったが、その平面形状や断面形態等の特徴から陥し穴と考える。


A類
90号土坑
892.20m
91号土坑
896.70m
896.70m
47号土坑
895.20m
92号土坑
896.00m
896.50m
28号土坑
895.20m
0
(1:40)
1m

第10図　土坑(1)

90号土坑（SK90）：６区のⅡ−I−8・13グリッドに位置する。重複関係はない。122×72cmの規模をはかり、楕円形を呈する。検出面からの深さは63cmを測る。覆土は４層に分けられる。１層はしまりのよい褐色（10YR4/4）土で、２層は１層に近似しているが、黒色が強い。３層はしまりの悪い黒褐色（10YR2/2）土でローム土が混じる。４層はローム土を主体とする。底面にはピット等は認められなかった。底面にはピットなどの特別な施設は認められなかったが、その平面形状や断面形態等の特徴から陥し穴と考える。

91号土坑（SK91）：５区のⅡ−K−10・15グリッドに位置する。重複関係はない。200×120cmの規模をはかり、楕円形を呈する。検出面からの深さは90cmを測る。覆土は５層に分けられる。１層はしまりのやや悪い暗褐色（10Ｙ R3/3）土で、２層はローム土が主体を占める。３層はしまりのよい褐色（10YR4/4）土で、４層はしまりのやや悪い褐色（10YR4/6）土である。５層は壁面からのローム土の崩落土と考えられる。底面には５ヶのピットが認められた。底面にみられるピット５ヶを逆茂木痕と判断し、陥し穴と考える。

92号土坑（SK92）：５区のⅡ−L−2・7グリッドに位置する。重複関係はない。230×約110cmの規模をはかり、楕円形を呈する。検出面からの深さは140cmを測る。覆土は５層に分けられる。１層はしまりのよい暗褐色（10Ｙ R3/3）土で、２層はローム土が主体であるが、１層の影響で暗褐色めく。３層・４層もローム土が主体であるが、３層には暗褐色土がわずかに混じっており、分層した。ともに壁面の崩落土であると考えられる。５層は褐色（10Ｙ R4/4）土でローム土も混じっている。底面にはピット等は認められなかった。底面にはピットなどの特別な施設は認められなかったが、その平面形状や断面形態等の特徴から陥し穴と考える。

B類　円形を呈する土坑

本類は、平面規模や断面形態の相違からＢ１類〜Ｂ５類の５類型に細分した。59号土坑以外では遺物の出土はみられず、したがって時期の決定は難しい。また用途・性格についても不明である。

B1類　径50cm前後の小形で、断面形態が円筒状を呈するもの（２基）

77号と82号があてはまる。細い円筒状の断面形態を持つ本類は杭状のものを埋設した可能性も考えられるが、検出したのは２基にすぎないため分布の特徴はつかめない。

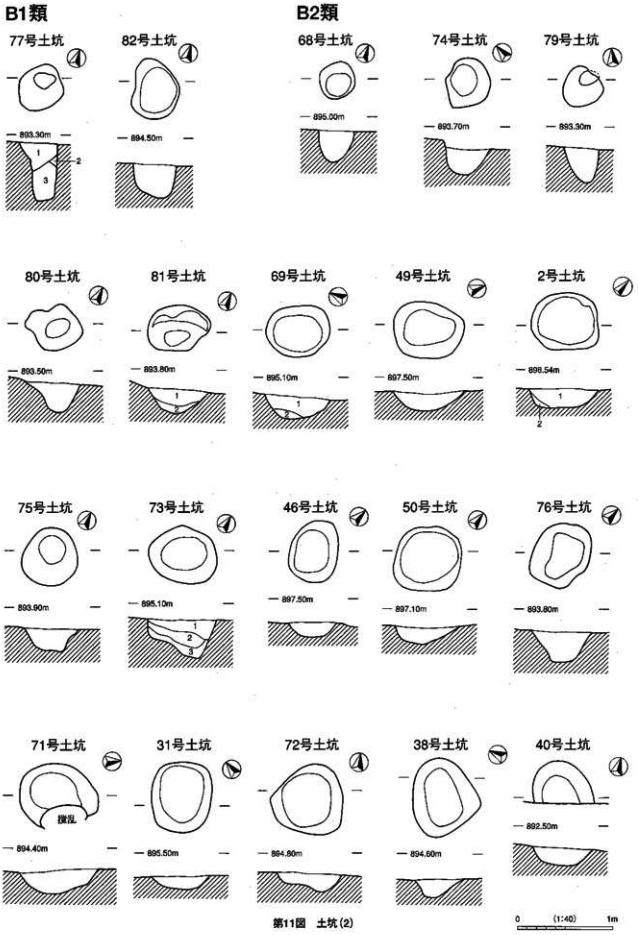
77号土坑（SK77）：５区のⅡ−M−3グリッドに位置する。重複関係はない。50×40cmの規模で、やや不整な円形を呈する。検出面からの深さは60cmを測る。覆土は３層に分けられる。１層はしまりの良い暗褐色（10Ｙ R3/4）土の単層である。２層はローム土であり、壁面からの崩落土であると考えられる。３層はしまりの悪い黒褐色（10Ｙ R2/3）土である。

B2類　径100cm以下の小形で、断面形態が皿状を呈するもの（23基）

１号・２号・16号・24号・26号・31号・38号・40号・46号・49号・50号・56号・68号・69号・71〜76号・79〜81号があてはまる。分布にきわだった特徴は見出せない。

1号土坑（SK01）：１区のⅡ−F−20グリッドに位置する。重複関係はない。径87×78cm、深さ27cmの規模をはかり、やや不整な楕円形を呈する。覆土は2層に分けられた。1層は粘性のあるしまったにぶい黄褐色（10YR4/3）土である。2層も1層を基軸とするが、わずかに基本土層Ⅲ層の土が混じっているため、分層したものである。

73号土坑（SK73）：５区のⅡ−G−25グリッドに位置する。重複関係はない。73×62cmの規模をはかり、不整な円形を呈する。検出面からの深さは40cmを測る。覆土はしまりの良い暗褐色（10Ｙ R3/4）土の単層


B1類
77号土坑
893.30m
82号土坑
894.50m
B2類
68号土坑
895.00m
74号土坑
893.70m
79号土坑
893.30m
80号土坑
893.50m
81号土坑
893.80m
69号土坑
895.10m
49号土坑
897.50m
2号土坑
896.54m
75号土坑
893.90m
73号土坑
895.10m
46号土坑
897.50m
50号土坑
897.10m
76号土坑
893.80m
71号土坑
撹乱
894.40m
31号土坑
895.50m
72号土坑
894.50m
38号土坑
894.50m
40号土坑
892.50m
0
(1:40)
1m

第11図　土坑(2)

である。

B3類　径約100cm以上の大形で、断面形態が皿状を呈するもの（9基）

5号・20号・27号・34号・42号・44号・45号・88号・89号土坑があてはまる。分布にきわだった特徴は見出せない。

88号土坑（SK88）：6区のⅡ−I−25グリッドに位置する。重複関係はない。約120×約100cmの規模をはかり、やや不整な円形を呈する。検出面からの深さは42cmを測る。覆土はしまりのよい暗褐色（10YR4/4）土の単層である。

B4類　径約100cm以上の大形で、断面形態は最深部を中央部にもつ砲弾形を呈するもの（5基）

7号・15号・21号・85号・97号土坑があてはまる。97号を除くと他は尾根頂部付近に認められているが、分布の特徴はつかめない。

15号土坑（SK15）：2区のⅡ−G−17グリッドに位置する。長径178cm×短径130cm×深さ63cmの規模をはかり、不整な楕円形を呈する。重複関係はない。底面は中心に向かって錘状を成し、中心部で最深部をはかる。底面に特別な施設は確認できなかった。覆土は3層に分けられた。1層は粘性のあるしまったにぶい黄褐色（10YR4/3）土で、わずかに基本土層Ⅲ層の土が混じる。2層も1層を基軸とするが、基本土層Ⅲ層の混じりが1層よりも大きいため、分層した。3層はしまりの強い灰黄褐色（10YR4/2）である。

B5類　径100cm程の規模で、断面形態は垂直にたちあがる箱形を呈するもの（33基）

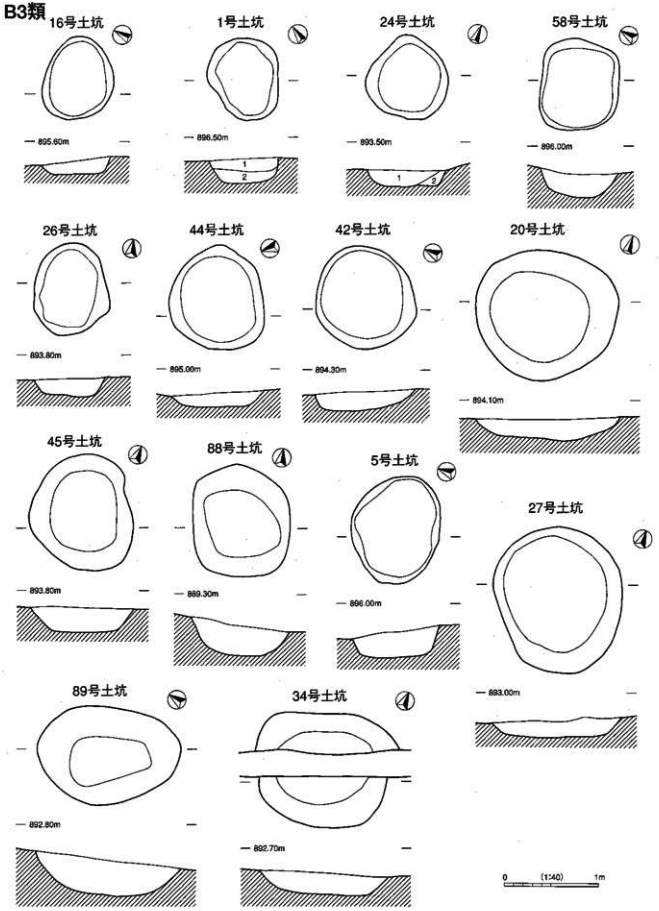
本類には底面が平坦なもの（60・61・63・64・67・78・84・93〜96・98〜107）とやや起伏する底面をもつもの（51〜57・59・62・65・66・83）がみられる。5区のⅡ−L−12〜18グリッド付近に集中してみられ、重複関係をもつものも少なくない。ただし、性格や用途をつかむことはできなかった。

52号土坑（SK52）：5区のⅡ−K−24グリッドに位置する。重複関係はない。約90×約80cmの規模をはかり、不整な円形を呈する。検出面からの深さは45cmを測る。覆土は3層に分けられる。1層はしまりのやや悪い暗褐色（10YR3/4）土であり、2層は1層の土にロームブロックが多量に混入する。3層はロームブロックの割合が2層よりもさらに多い。61号土坑（SK61）：5区のⅡ−L−22・23グリッドに位置する。重複関係はない。径約100cmの、不整な円形を呈する。検出面からの深さは100cmを測る。覆土は4層に分けられる。1層はしまりのややよい暗褐色（10YR3/4）土であり、2層は黒褐色（10YR2/3）土、3層は2層の土にローム土が多量に混じる。4層はローム土の割合が3層よりもさらに多い。

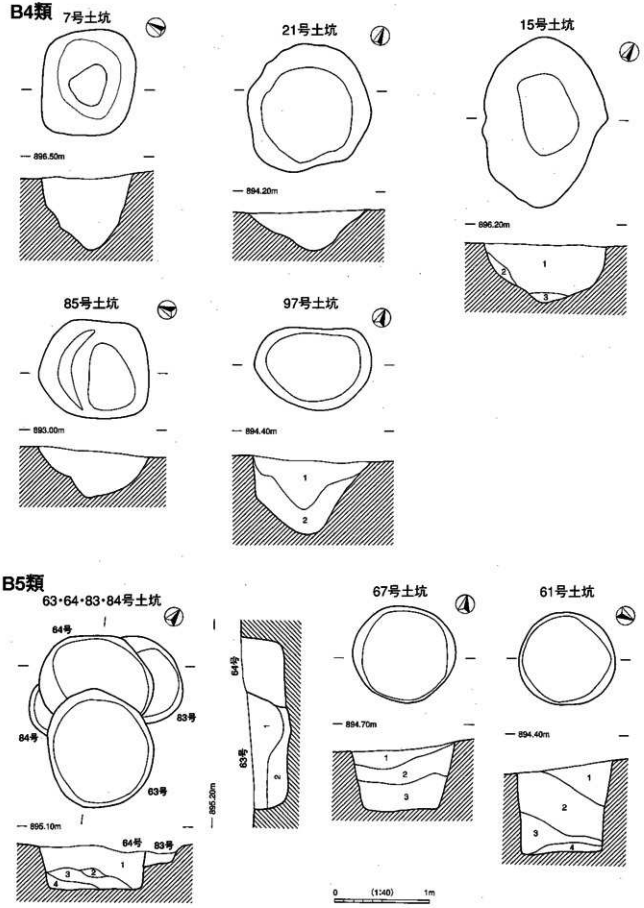
59号土坑（SK59）：5区のⅡ−L−12グリッドに位置する。重複関係はない。95×90cmの規模をはかり、不整な円形を呈する。検出面からの深さは15cmを測る。覆土は2層に分けられる。1層はしまりのよい黒褐色（10YR2/3）土であり、2層は1層の土にローム土が多量に混じる。遺物としては小破片のため図示してはいないが、近世の瀬戸美濃の鉄釉陶器の碗片が1点出土した。

96号土坑（SK96）：5区のⅡ−L−13・18グリッドに位置する。重複関係はない。116×104cmの規模をはかり、円形を呈する。検出面からの深さは85cmを測る。覆土は5層に分けられる。1層はしまりのややよい暗褐色（10YR4/6）土でローム土も混じる。2層は1層と同質だが、ローム土の割合が少ない。3層はやや粘性をもつ褐色（10YR4/6）土でローム土が混じる。4層は3層よりもローム土の割合が多い。5層は褐色（10YR4/4）土であり、ローム土の混入はほとんどない。

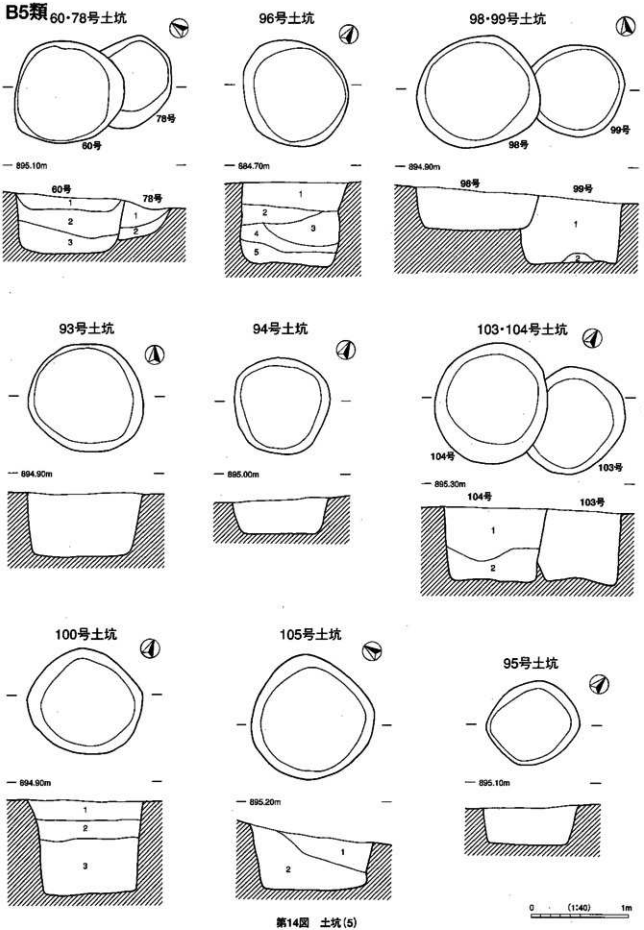
105号土坑（SK105）：5区のⅡ−L−21グリッドに位置する。重複関係はない。径約120cm程の円形を呈する。検出面からの深さは70cmを測る。覆土は2層に分けられる。1層はしまりのややよい暗褐色（10YR4/6）土でローム土も混じる。2層は褐色（10YR4/4）土であり、ローム土の混入はほとんどない。


B3類
16号土坑
895.60m
1号土坑
896.50m
1
2
24号土坑
893.50m
1
2
58号土坑
896.00m
26号土坑
893.80m
44号土坑
895.00m
42号土坑
894.30m
20号土坑
894.10m
45号土坑
893.80m
88号土坑
889.30m
5号土坑
896.00m
27号土坑
893.00m
89号土坑
892.80m
34号土坑
892.70m
0
(1:40)
1m

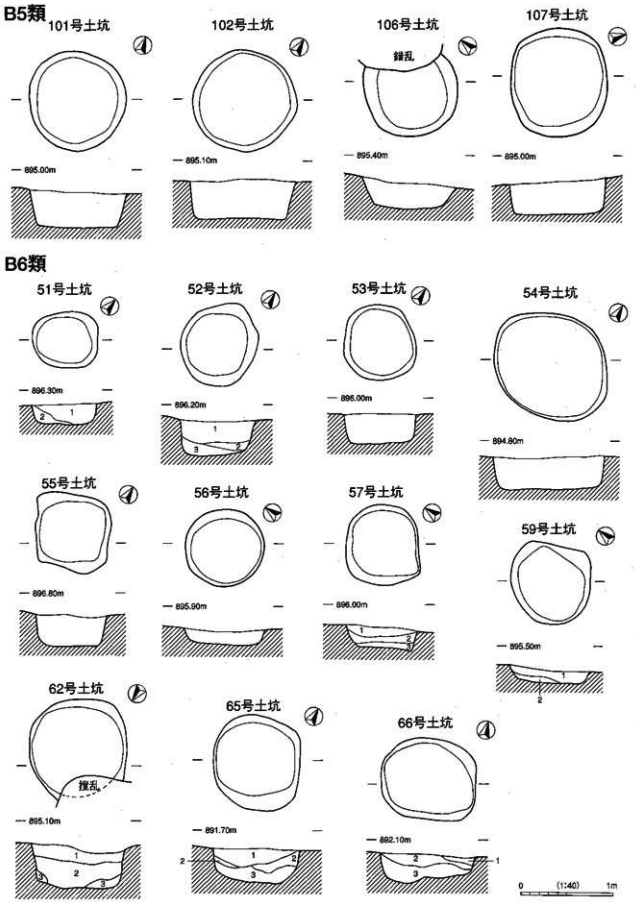
第12図　土坑(3)


B4類
7号土坑
896.50m
21号土坑
894.20m
15号土坑
896.20m
85号土坑
893.00m
97号土坑
894.40m
B5類
63・64・83・84号土坑
64号
83号
84号
63号
895.10m
895.20m
67号土坑
894.70m
61号土坑
894.40m
0 (1:40) 1m

第13図　土坑(4)


B5類
60・78号土坑
78号
60号
895.10m
60号
78号
1
2
3
96号土坑
894.70m
1
2
3
4
5
98・99号土坑
99号
98号
894.90m
98号
99号
1
2
93号土坑
894.90m
94号土坑
895.00m
103・104号土坑
104号
103号
895.30m
104号
103号
1
2
100号土坑
894.90m
1
2
3
105号土坑
895.20m
1
2
95号土坑
895.10m
0
(1:40)
1m

第14図　土坑(5)


B5類
101号土坑
895.00m
102号土坑
895.10m
106号土坑
錯乱
895.40m
107号土坑
895.00m
B6類
51号土坑
896.30m
52号土坑
896.20m
53号土坑
896.00m
54号土坑
894.80m
55号土坑
896.80m
56号土坑
895.90m
57号土坑
896.00m
59号土坑
895.50m
62号土坑
撹乱
895.10m
65号土坑
891.70m
66号土坑
892.10m
0
(1:40)
1m

第15図　土坑(6)

C類　楕円形を呈する土坑（21基）

本類は、平面規模や断面形態の相違からC1類とC2類に細分した。いずれも遺物の出土はみられず、したがって時期の決定は難しい。また用途・性格についても不明である。

C1類　長軸約120cm以下の小形のもの（9基）

垂直に近いたちあがる壁をもつもの（13号・16号・48号・70号）となだらかにたちあがる壁をもつもの（8号・22号・23号・25号・32号）に大別できる。

13号土坑（SK13）：1区のⅡ−F−13グリッドに位置する。長径103cm×短径52cm,深さ33cmの規模をはかり、楕円形を呈する遺構である。重複関係はない。覆土は2層に分けられた。1層はしまりの弱い黒褐色（10YR2/2）土である。2層は粘性のあるしまったにぶい黄褐色（10YR4/3）が主体であるが、これに1層の土がブロックで混じっている。

C2類　長軸約120cm以上の大形のもの（12基）

9号・11号・12号・16〜19号・29号・36号・39号・43号・87号土坑があてはまる。このうち18号・36号は最深部を中央部にもつ断面形態である。

11号土坑（SK11）：1区のⅡ−K−12グリッドに位置する。長径137cm×短径88cm,深さ34cmの規模をはかり、楕円形を呈する遺構である。重複関係はない。覆土は3層に分けられた。1層はしまりの弱い黒褐色（Hue10YR2/2）土であり、炭化物が認められる。2層は1層と同じ黒褐色土が主体であるが、基本土層のⅢ層の土が含まれている。3層はしまりのある褐色（10YR4/6）土が主体を成し、1層の黒褐色土がわずかに混じっている。

18号土坑（SK18）：2区のⅡ−G−9グリッドに位置する。長径210cm×短径119cm,深さ47cmの規模をはかり、不整な楕円形を呈する。重複関係はない。覆土は2層に分けられた。1層はしまりの悪い黒色（10YR2/1）土であり、これにわずかながら基本土層Ⅲ層の土がブロックで混じる。2層はしまりのあるにぶい黄褐色（10YR4/3）土で、これに1層の土が混じる。

D類　不整な平面形状をもつ土坑（6基）

30・33・35・37・41・86号土坑があてはまる。不整な平面形状であるため、分類不可能なものである。いずれも遺物の出土はみられず、したがって時期の決定は難しい。また用途・性格についても不明である。

第4節　遺物

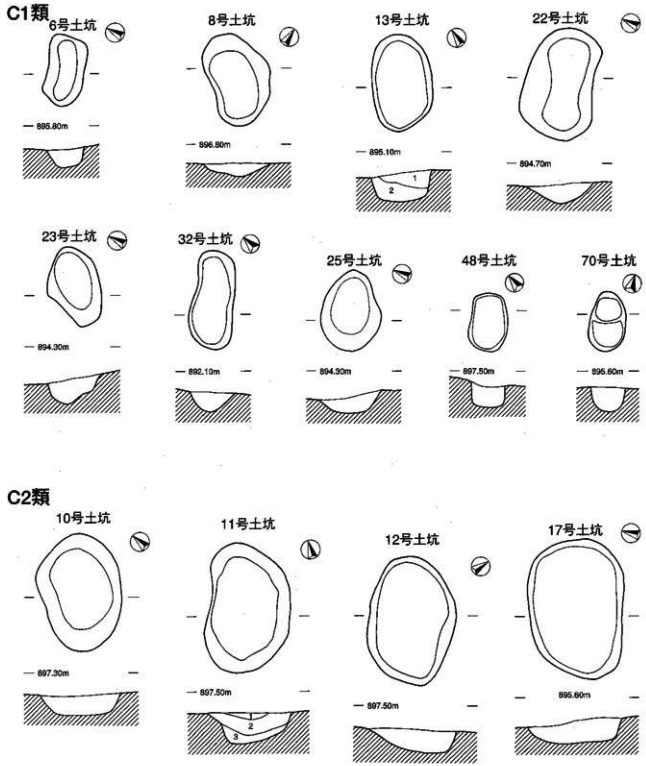
59号土坑から瀬戸美濃の鉄釉陶器碗片が1点出土したが、小片のため図示はしていないため、第19・20図に掲載した遺物はすべて遺構外出土である。

1　土器・陶磁器（第19図）

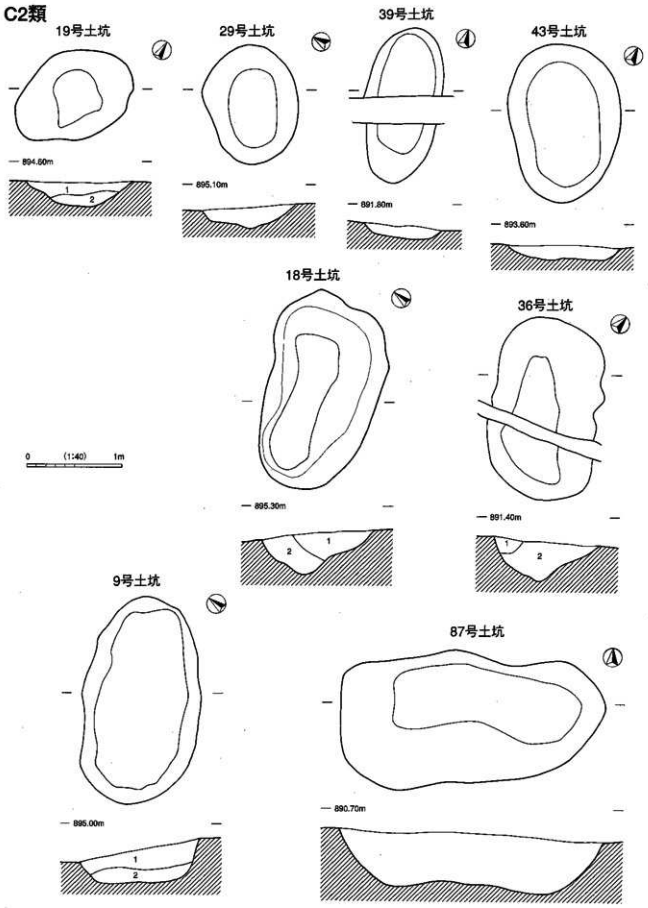
1は縄文後期の深鉢であり、内面には横方向のケズリが、外面には横方向のミガキが施されている。底部には網代痕が認められる。他に縄文時代中期〜後期頃と考えられる縄文時代の土器片が数片みられる。

また平安時代頃の土師器片が数点出土しているが小片であるため図示しなかった。

15世紀後半から16世紀の中世内耳鍋は、小片がビニール袋1つ（約450g）出土しているが、図示できた

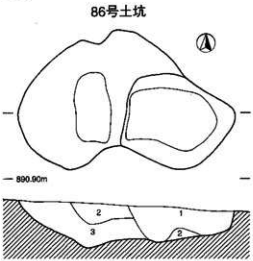

C1類
6号土坑
895.80m
8号土坑
896.80m
13号土坑
895.10m
1
2
22号土坑
894.70m
23号土坑
894.30m
32号土坑
892.10m
25号土坑
894.30m
48号土坑
897.50m
70号土坑
895.60m
C2類
10号土坑
897.30m
11号土坑
897.50m
1
2
3
12号土坑
897.50m
17号土坑
895.60m
0
(1:40)
1m

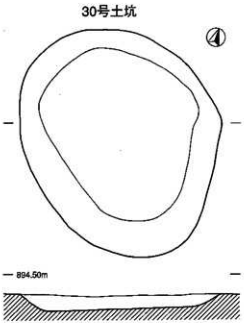
第16図　土坑(7)

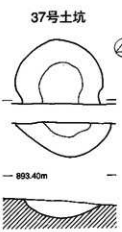

C2類
19号土坑
894.50m
1
2
29号土坑
895.10m
39号土坑
891.80m
43号土坑
893.60m
18号土坑
895.30m
2
1
36号土坑
891.40m
1
2
0　(1:40)　1m
9号土坑
895.00m
1
2
87号土坑
890.70m

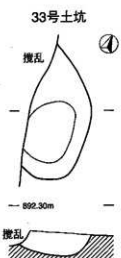
第17図　土坑(8)

D類

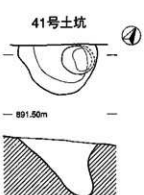

86号土坑
890.90m
1
2
3
3


30号土坑
894.50m


37号土坑
893.40m


33号土坑
攪乱
892.30m
攪乱

35号土坑
攪乱
892.60m
攪乱
1
2


41号土坑
891.50m

0
(1:40)
1m

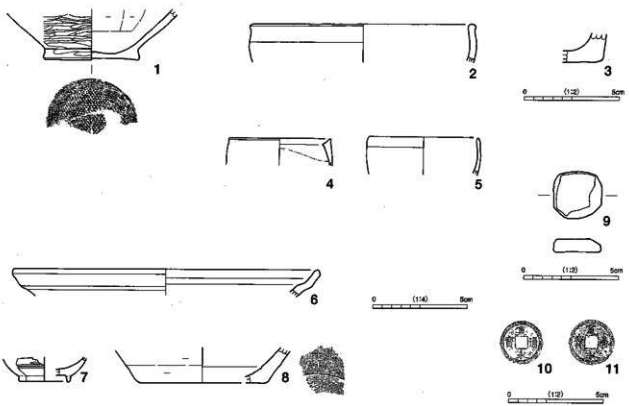
第18図　土坑(9)

のは2・3のみである。他には、かわらけ片、大窯の丸皿片も少量だが出土している。

4～7は近世の陶磁器である。4は香炉、5は灰釉丸碗、6はすり鉢の口縁である。4は瀬戸美濃陶器であり、5・6は断定はできないが瀬戸美濃陶器の可能性が高い。7は伊万里染付碗で18世紀後半から19世紀前半に位置づけられる。8は産地不明のすり鉢であり、近世末頃の所産と考えられる。

この他にも小片のため図示しなかった陶磁器片が少なからず出土している。近世前半（17世紀～18世紀前半）では瀬戸美濃陶器の黄瀬戸の丸皿、志野の丸皿、天目茶碗が、近世後半（18世紀後半以降）では瀬戸美濃陶器の徳利、灰釉丸碗、仏飯、仏花ぴん、瀬戸美濃磁器碗などが認められ、他にも唐津焼や京焼と思われるものもみられる。近代の陶磁器片も少量ながら出土している。

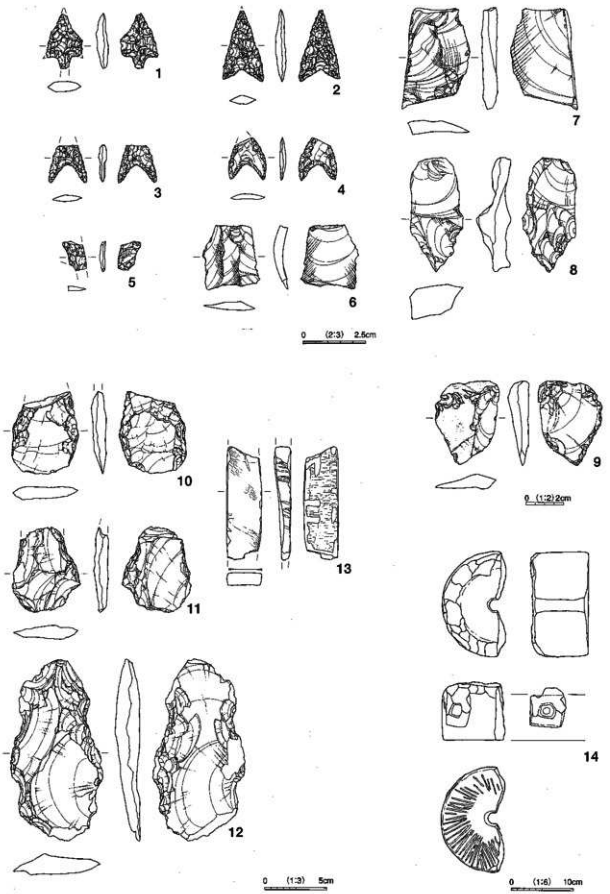
9は内耳鍋片を用いた土製円板であり、周囲を研磨している。10・11は寛永通宝である。



第19図　出土土器・円板・古銭

2　石器（第20図）

1～5は黒曜石製の石鏃である。1と3は完形で、1は八千穂村教育委員会で実施した遺跡分布調査の際に採集されたものである。3・4は先端部が欠けており、5は基部のみが残存している。6～9は剥片である。9が頁岩製である以外は黒曜石製である。10～12は打製石斧であり、無斑晶質安山岩製である。10・11は先端部を欠いている。12は完形品である。12は馬込遺跡内に存在する水道タンク建設がかつて行われた際に、岩崎春芳氏により採集されたものである。13は砥石で細粒砂岩製である。14は茶臼の上臼であり、斑晶を含む多孔質安山岩製である。外面にはノミの整形痕を残している。この茶臼は馬込遺跡の南斜面下の水田で地元の桜井利雄氏がかつて採集したものである。



第20図　出土石器

遺構名	遺構記号	図版番号	地区	グリッド	規模(cm)	深さ	形状	覆　土	備　考
1号土坑	SK01	第12図	1	Ⅱ-F-20	87×78	27	B2	本文に記載あり	
2号土坑	SK02	第11図	1	Ⅱ-F-20	70×60	20	B2	1.にぶい黄褐色土(10YR4/3) 2.にローム混じる	
3号土坑	欠番	—	—	—	—	—	—	—	
4号土坑	欠番	—	—	—	—	—	—	—	
5号土坑	SK05	第12図	1	Ⅱ-F-13・18	115×93	33	B3	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
6号土坑	SK06	第16図	1	Ⅱ-F-15	75×42	23	C1	暗褐色土(10YR3/4)	
7号土坑	SK07	第13図	1	Ⅱ-F-19	110×100	80	B4	黒色土(10YR2/1)ローム混じる	
8号土坑	SK08	第16図	1	Ⅱ-F-24	98×64	15	C1	黒色土(10YR2/1)ローム混じる	
9号土坑	SK09	第17図	1	Ⅱ-F-14	214×125	40	C2	1.黒褐色土(10YR2/2) 2.暗褐色土(10YR3/3)ローム混じる	
10号土坑	SK10	第16図	1	Ⅱ-K-7	123×85	28	C2	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
11号土坑	SK11	第16図	1	Ⅱ-K-12	137×88	34	C2	本文に記載あり	
12号土坑	SK12	第16図	1	Ⅱ-K-7・12	138×95	28	C2	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
13号土坑	SK13	第16図	1	Ⅱ-F-13	103×52	33	C1	本文に記載あり	
14号土坑	欠番	—	—	—	—	—	—	—	
15号土坑	SK15	第13図	2	Ⅱ-G-17	178×130	63	B4	本文に記載あり	
16号土坑	SK16	第12図	2	Ⅱ-G-13	90×73	10	B2	黒色土(10YR2/1)ローム混じる	
17号土坑	SK17	第16図	2	Ⅱ-G-14	153×102	26	C2	黒色土(10YR2/1)ローム混じる	
18号土坑	SK18	第17図	2	Ⅱ-G-9	210×119	47	C2	本文に記載あり	
19号土坑	SK19	第17図	2	Ⅱ-G-8・9	133×95	28	C2	1.黒褐色土(10YR3/2) 2.にローム混じる	
20号土坑	SK20	第12図	2	Ⅱ-G-3・8	150×135	23	B3	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
21号土坑	SK21	第13図	2	Ⅱ-G-3	135×130	43	B4	黒褐色土(10YR3/2)ローム混じる	
22号土坑	SK22	第16図	2	Ⅱ-G-5	122×70	23	C1	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
23号土坑	SK23	第16図	2	Ⅱ-G-3	86×56	33	C1	黒褐色土(10YR3/2)ローム混じる	
24号土坑	SK24	第12図	2	Ⅱ-G-3	87×84	20	B2	1.黒褐色土(10YR3/2)　2.1にローム混じる	
25号土坑	SK25	第16図	2	Ⅱ-G-4	85×65	24	C1	黒褐色土(10YR3/2)ローム混じる	
26号土坑	SK26	第12図	2	Ⅱ-G-3	99×80	23	B2	黒褐色土(10YR3/2)ローム混じる	
27号土坑	SK27	第12図	2	Ⅱ-G-3	156×134	21	B3	黒褐色土(10YR3/2)ローム混じる	
28号土坑	SK28	第10図	2	Ⅱ-G-9	245×125	47	A	本文に記載あり	
29号土坑	SK29	第17図	2	Ⅱ-G-5	128×98	18	C2	黒色土(10YR2/1)ローム混じる	
30号土坑	SK30	第18図	2	Ⅱ-B-25・Ⅱ-G-5	252×203	16	D	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
31号土坑	SK31	第11図	2	Ⅱ-G-10	75×63	18	B2	黒色土(10YR2/1)ローム混じる	
32号土坑	SK32	第16図	4	Ⅱ-D-15	105×45	22	C1	暗褐色土(10YR3/3)	
33号土坑	SK33	第18図	4	Ⅱ-D-15	図面上X図上	30	D	暗褐色土(10YR3/3)炭化物含む	
34号土坑	SK34	第12図	4	Ⅱ-D-14	190×115	45	B3	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
35号土坑	SK35	第18図	4	Ⅱ-D-19	図面上X図上	40	D	1.黒色土(10YR2/1)　2.1にローム混じる	
36号土坑	SK36	第17図	4	Ⅱ-D-11	153×117	30	C2	1.にぶい黄褐色土(10YR5/3) 2.黒褐色土(7.5YR3/1)	
37号土坑	SK37	第18図	4	Ⅱ-D-12・17	123×100	20	D	暗褐色土(10YR3/4)	
38号土坑	SK38	第11図	3	Ⅱ-C-23	77×68	20	B2	暗褐色土(10YR3/3)ローム混じる	
39号土坑	SK39	第17図	4	Ⅱ-D-10	165×75	15	C2	黒褐色土(10YR2/2)	
40号土坑	SK40	第11図	4	Ⅱ-D-14・15	—	20	B2	暗褐色土(10YR3/3)	
41号土坑	SK41	第18図	4	Ⅱ-D-11	—	20	D	黒色土(10YR2/1)	
42号土坑	SK42	第12図	3	Ⅱ-C-23	107×102	20	B3	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	

表2　土坑一覧表(1)

遺構名	遺構記号	図版番号	地区	グリッド	規模(cm)	深さ	形状	覆　土	備　考
43号土坑	SK43	第17図	3	Ⅱ-C-19	167×120	16	C2	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
44号土坑	SK44	第12図	3	Ⅱ-H-2	110×95	17	B3	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
45号土坑	SK45	第12図	3	Ⅱ-D-21	120×110	26	B3	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	
46号土坑	SK46	第11図	5	Ⅰ-T-15	65×50	35	B2	暗褐色土(10YR3/4)	
47号土坑	SK47	第10図	5	Ⅱ-P-6	150×60	65	A	本文に記載あり	
48号土坑	SK48	第16図	5	Ⅱ-P-1	62×42	27	C1	暗褐色土(10YR3/4)	
49号土坑	SK49	第11図	5	Ⅱ-P-1	64×60	20	B2	暗褐色土(10YR3/4)	
50号土坑	SK50	第11図	5	Ⅱ-P-2	70×70	18	B2	暗褐色土(10YR3/4)	
51号土坑	SK51	第15図	5	Ⅱ-K-24	70×60	24	B5	1.暗褐色土(10YR3/4) 2.ローム多く混じる暗褐色土	
52号土坑	SK52	第15図	5	Ⅱ-K-24	90×80	45	B5	本文に記載あり	
53号土坑	SK53	第15図	5	Ⅱ-K-24	80×80	33	B5	暗褐色土(10YR3/4)	
54号土坑	SK54	第15図	5	Ⅱ-L-21	135×110	35	B5	暗褐色土(10YR3/4)	
55号土坑	SK55	第15図	5	Ⅱ-K-14	80×80	35	B5	黒褐色土(10YR2/3)	
56号土坑	SK56	第15図	5	Ⅱ-L-16	80×80	12	B2	暗褐色土(10YR3/4)	
57号土坑	SK57	第15図	5	Ⅱ-L-16	85×80	30	B5	1.暗褐色土(10YR3/4)　2.1にローム混じる 3.ロームの割合更に多い	
58号土坑	SK58	第12図	5	Ⅱ-L-16	98×85	30	B2	黒褐色土(10YR2/3)	
59号土坑	SK59	第15図	5	Ⅱ-L-12	95×90	15	B5	本文に記載あり	瀬戸美濃の鉄釉陶器の破片 1点出土
60号土坑	SK60	第14図	5	Ⅱ-L-13	122×105	62	B5	1.ローム多量に混じる暗褐色土(10YR3/4) 2.1よりロームの混入大 3.2と同じ土質だが、しまりが悪い	78号より新
61号土坑	SK61	第13図	5	Ⅱ-L-22・23	100×100	100	B5	1.暗褐色土(10YR3/4)　2.黒褐色土(10YR2/3) 3.2にローム多量に混じる　4.ロームの割合更に多い	
62号土坑	SK62	第15図	5	Ⅱ-L-13	110×110	48	B5	1.暗褐色土(10YR3/4) 2.1茶本だが黒色強い 3.1にローム多量に混じる	
63号土坑	SK63	第13図	5	Ⅱ-L-12・13・17・18	100×100	48	B5	1.暗褐色土(10YR3/4)　2.1にローム多量に混じる	64号・83号・84号より新
64号土坑	SK64	第13図	5	Ⅱ-L-12	120×120	45	B5	1.暗褐色土(10YR3/4) 2.1にロームが多量に混じる 3.ローム2より少ない 4.2に近くローム割合多い	63より古、83号・84号より新
65号土坑	SK65	第15図	5	Ⅱ-L-24・Ⅱ-Q-4	103×95	48	B5	1.暗褐色土(10YR3/4)　2.1にローム多量に混じる 3.ロームの割合が2よりも少ない	
66号土坑	SK66	第15図	5	Ⅱ-Q-2	103×86	32	B5	1.暗褐色土(10YR3/4)　2.1にローム多量に混じる 3.ロームの割合が2よりも少ない	
67号土坑	SK67	第13図	5	Ⅱ-L-14	110×103	70	B5	1.黒褐色土(10YR2/3) 2.1にローム多量に混じる　3.1よりもしまりが悪い	
68号土坑	SK68	第11図	5	Ⅱ-L-9	47×37	35	B2	黒褐色土(10YR2/3)	
69号土坑	SK69	第11図	5	Ⅱ-L-4	68×55	26	B2	1.黒褐色土(10YR2/3)　2.1にローム多量に混じる	
70号土坑	SK70	第16図	5	Ⅱ-L-3・4	63×39	27	C1	暗褐色土(10YR3/4)	
71号土坑	SK71	第11図	5	Ⅱ-L-10	80×80	26	B2	黒褐色土(10YR2/3)	
72号土坑	SK72	第11図	5	Ⅱ-L-5	75×75	22	B2	暗褐色土(10YR3/4)	
73号土坑	SK73	第11図	5	Ⅱ-G-25	73×62	40	B2	本文に記載あり	
74号土坑	SK74	第11図	5	Ⅱ-M-6	50×50	28	B2	暗褐色土(10YR3/4)	
75号土坑	SK75	第11図	5	Ⅱ-M-1	60×60	25	B2	暗褐色土(10YR3/4)	
76号土坑	SK76	第11図	5	Ⅱ-M-2	70×58	33	B2	暗褐色土(10YR3/4)	

表3　土坑一覧表(2)

遺構名	遺構記号	図版番号	地区	グリッド	規模(cm)	深さ	形状	覆　土	備　考
77号土坑	SK77	第11図	5	Ⅱ-M-3	50×40	60	B1	本文に記載あり	
78号土坑	SK78	第14図	5	Ⅱ-L-13	90×90	40以上	B5	1.暗褐色土(10YR3/4) 2.1にローム多量に混じる	60号より古
79号土坑	SK79	第11図	5	Ⅱ-M-3	40×40	38	B2	暗褐色土(10YR3/4)	
80号土坑	SK80	第11図	5	Ⅱ-H-18	60×50	33	B2	暗褐色土(10YR3/4)	
81号土坑	SK81	第11図	5	Ⅱ-H-18·19	65×50	26	B2	1.暗褐色土(10YR3/4)　2.1にローム混じる	
82号土坑	SK82	第11図	5	Ⅱ-H-13	65×50	36	B1	1.暗褐色土(10YR3/4)　2.1にローム混じる	
83号土坑	SK83	第13図	5	Ⅱ-L-12	—	—	B5	暗褐色土(10YR3/4)ローム混じる	63号·64号より古
84号土坑	SK84	第13図	5	Ⅱ-L-12·17	—	—	B5	記載なし	63号·64号より古
85号土坑	SK85	第13図	6	Ⅱ-D-24·Ⅱ-I-4	115×103	53	B4	暗褐色土(10YR3/3)	
86号土坑	SK86	第18図	6	Ⅱ-J-6	230×120	48	D	1.ロームの混じった暗褐色土(10YR3/3) 2.暗褐色土(10YR4/4)　3.黒褐色土(10YR2/2)	
87号土坑	SK87	第17図	6	Ⅱ-I-14·15	280×140	68	C2	暗褐色土(10YR4/4)	
88号土坑	SK88	第12図	6	Ⅱ-I-25	120×100	42	B3	本文に記載あり	
89号土坑	SK89	第12図	6	Ⅱ-I-7·8	150×105	47	B3	暗褐色土(10YR3/3)	
90号土坑	SK90	第10図	6	Ⅱ-I-8·13	122×72	63	A	本文に記載あり	
91号土坑	SK91	第10図	5	Ⅱ-K-10·15	200×120	90	A	本文に記載あり	
92号土坑	SK92	第10図	5	Ⅱ-L-2·7	230×110	140	A	本文に記載あり	
93号土坑	SK93	第14図	5	Ⅱ-L-17	120×113	65	B5	暗褐色土(10YR3/4)	
94号土坑	SK94	第14図	5	Ⅱ-L-8·9	100×100	40	B5	暗褐色土(10YR3/4)	
95号土坑	SK95	第14図	5	Ⅱ-L-13	90×83	42	B5	暗褐色土(10YR3/4)	
96号土坑	SK96	第14図	5	Ⅱ-L-13·18	116×104	85	B5	本文に記載あり	
97号土坑	SK97	第13図	5	Ⅱ-L-18	125×87	80	B4	1.褐色土(10YR4/4)　2.壁面からの崩落土と考えられるローム主体の黄褐色土	
98号土坑	SK98	第14図	5	Ⅱ-L-17·18	127×112	42	B5	ロームの混入の度合いが高い暗褐色土(10YR3/4)	99号より新
99号土坑	SK99	第14図	5	Ⅱ-L-18	95×95	70	B5	1.暗褐色土(10YR3/4)　2.ローム主体	98号より古
100号土坑	SK100	第14図	5	Ⅱ-L-17	110×110	100	B5	1.ローム混じる暗褐色土(10YR4/6) 2.1よりロームの割合少ない 3.ローム混じった褐色土(10YR4/6)	
101号土坑	SK101	第15図	5	Ⅱ-L-17	105×105	38	B5	暗褐色土(10YR3/4)	
102号土坑	SK102	第15図	5	Ⅱ-L-17	110×110	43	B5	暗褐色土(10YR3/4)	
103号土坑	SK103	第14図	5	Ⅱ-L-21	110×100	75	B5	ローム混じった暗褐色土(10YR4/6)	104号より古
104号土坑	SK104	第14図	5	Ⅱ-L-21	128×117	76	B5	1.ローム混じった暗褐色土(10YR4/6) 2.褐色土(10YR4/4)	103号より新
105号土坑	SK105	第14図	5	Ⅱ-L-21	120×120	70	B5	本文に記載あり	
106号土坑	SK106	第15図	5	Ⅱ-L-16·17	100×100	30	B5	暗褐色土(10YR3/4)	
107号土坑	SK107	第15図	5	Ⅱ-L-13	117×105	39	B5	暗褐色土(10YR3/4)	

表4　土坑一覧表(3)

図版番号	種　類	出土場所	残存度	色　調	大きさ(cm)	成形の特徴	備　　考
第19図−1	縄文土器	遺構外	底部1/2	にぶい黄橙色	器高5.3 底径10.0	外面黒色処理→研磨、内面ケズリ→ナデ	網代底あり 組土器か?黒色磨研土器
第19図−2	内耳土器	遺構外	口縁部1/10	にぶい黄褐色	口径24	外面スス付着	
第19図−3	内耳土器	遺構外	底部1/10	にぶい褐色	—	回転ナデ	
第19図−4	香炉	遺構外	口縁部1/5	にぶい黄橙色	口径10.8	回転ナデ→施釉	瀬戸美濃灰釉付掛
第19図−5	灰釉丸碗	遺構外	口縁部1/10	灰白色	口径11.8	回転ナデ→施釉	瀬戸美濃
第19図−6	すり鉢	遺構外	口縁部1/8	褐色	口径32	回転ナデ→施釉	瀬戸美濃鉄釉
第19図−7	碗	遺構外	底部1/6	明オリーブ灰色	底径5.4	高台貼り付け	伊万里
第19図−8	すり鉢	遺構外	底部1/8	にぶい褐色	底径13.6	回転ナデ→回転ケズリ	卸目が密
第19図−9	土製円板	遺構外	—	にぶい黄褐色	2.5×2.6 厚さ0.7	周囲を研磨	内耳鍋片を利用
第19図−10	寛永通宝	遺構外	—	—	—	—	
第19図−11	寛永通宝	遺構外	—	—	—	—	

表5　馬込遺跡　土器・土製品・古銭　観察表

図版番号	出土場所	器種	石　材	形態	残存状態	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備　考
第20図−1	遺構外	石鏃	黒曜石	凸基有茎	先端部・基部・茎部欠	22.0	15.0	5.0	1.1	
第20図−2	遺構外	石鏃	黒曜石	凹基無茎	先端部欠	28.5	16.0	4.0	1.2	
第20図−3	遺構外	石鏃	黒曜石	凹基無茎	先端部欠	15.0	15.0	3.0	0.4	
第20図−4	遺構外	石鏃	チャート	凹基無茎	先端部欠	17.0	15.0	2.5	0.6	
第20図−5	遺構外	石鏃	黒曜石	不明	基部一部のみ	12.0	10.0	2.5	0.2	
第20図−6	遺構外	剥片	黒曜石	—	—	26.0	23.0	5.5	2.2	微細な剥離あり
第20図−7	遺構外	剥片	黒曜石	—	—	40.5	27.0	6.5	6.0	
第20図−8	遺構外	剥片	黒曜石	—	—	46.0	21.0	14.0	9.1	微細な剥離あり
第20図−9	遺構外	剥片	頁岩	—	—	45.0	34.0	11.0	13.6	
第20図−10	遺構外	打製石斧	斑晶を含む多孔質安山岩	—	基部欠	66.0	54.0	12.0	46.5	
第20図−11	遺構外	打製石斧	無斑晶質安山岩	—	基部欠	68.0	56.0	12.0	43.0	
第20図−12	遺構外	打製石斧	無斑晶質安山岩	バチ形	完形	146.0	74.0	2.0	186.4	岩崎春芳氏蔵
第20図−13	遺構外	砥石	細粒砂岩	—	一部欠	91.0	28.0	13.5	50.2	
第20図−14	遺構外	茶臼	無斑晶質安山岩	上臼	1/2残	168.0	102.0	93.0	1961.3	桜井利雄氏蔵

表6　馬込遺跡石器観察表

第4章　まとめ

2ケ年にわたる今回の発掘調査では、遺構では竪穴状遺構1基、土坑104基が検出された。遺物は59号土坑から近世陶器片が認められたのを除くと他はすべて遺構外出土であった。そのため、遺構の時期決定には困難さが伴っている。また陥し穴である5基を除くと、土坑の性格や用途についても不明といわざるをえない。出土遺物は少量にすぎなかったが、村教委で実施した分布調査での採集分も含めて、縄文時代、平安時代、中・近世のものが出土した。

縄文時代では、中期から後期頃と考えられる土器片が数点、石器では石鏃5点、剥片4点、打製石斧3点がみられた。陥し穴5基が検出されたが、中世にみられるタイプとは形態等の特徴が異なるため、いずれも縄文時代の所産と考えられる。

馬込遺跡は、地元で「向山」あるいは「中原」と呼ばれる千曲川左岸の段丘上の、やせた尾根状に残る丘陵の頂部に展開している。今回の発掘調査では遺跡の西側が調査範囲となった。調査範囲では耕作土は比較的浅く、営農による攪乱は地山まで達しており、これは遺跡にも少なからず影響を与えている（註1）。したがって遺構が削平された可能性は十分考慮しなければならないが、少なくとも調査範囲内では縄文時代に集落が営まれていたとは考えられない。5基の陥し穴が検出されていることから、狩猟域であったと考えられる。遺跡が所在する佐口の集落は、馬込遺跡の所在する尾根状丘陵とその北側に位置する上野月夜原遺跡が所在する尾根状丘陵にはさまれた窪地に形成されている（註2）。遺跡についてみれば、本遺跡の他にも、佐口遺跡（縄文時代）、南平遺跡（縄文時代・平安時代）、佐口城跡（中世）が認められている。佐口遺跡は戦後盛んに行われた開田工事により、現在では正確な位置は不明となっている。また縄文時代の石剣が発見されたとの記録があるようだが、実物はすでに失われている。また上野月夜原遺跡は発掘調査は行われていないがかなり規模の大きい縄文中期遺跡であると想定される。近隣地域の縄文時代の集落はこうした遺跡に展開し、本遺跡は調査範囲のかぎり狩猟域であったと理解できよう。

平安時代では、内面黒色処理を施したものをはじめ数点の土器片がみられた。ただしこの時代に比定できる遺構は認められなかった。

中世では、内耳鍋片がビニール袋1つ出土したほか、かわらけ片、大窯の丸皿片が少量認められた。また砥石と既出資料の茶臼もこの時代に位置づけられる。1号竪穴状遺構は、伴出資料こそなかったものの、周辺から内耳鍋片が少なからず出土したため、中世に比定できる可能性がある。

中世には、佐口区を含む旧畑村は年貢を畑作物で納入したために、「畑物村」と称されていたという（井出1998　註3）。周辺には佐口城をはじめ、千代里地区の馬越城、八郡地区の通城、畑地区の下畑城、下畑下の城、権現山砦、穴原・崎田地区の蟻城などがあり、山城の存在が目立っている。なお、佐久町域では高野町地区の高野城、上区の福田城などがみられる。天文5年（1536年）に海の口城（南牧村）を落とした武田晴信は、天文12年（1543年）には本間城（小海町）段丘下にある宮の上に宿営地を設け、前山城（佐久市）へと向かった（註4）。この佐久侵攻の際には、下畑城を要として、「信玄道」と考えられる馬越から八郡→佐口→上区へと抜けるルートを経由したとも考えられており、そこから雁峰城（臼田町小田切）などを経て、ついには前山城（佐久市前山）を攻略している。

山城以外の中世遺跡では内耳鍋を伴う竪穴建物跡1基と墓群が検出された佐久町上区の小山寺窟遺跡が注目される。14世紀～17世紀に至る五輪塔が100余基発見され、この地に古寺が存在した可能性が指摘されている（佐久町教育委員会2002）。

このように中世、とりわけ戦国期においては本遺跡周辺では新たな動きがみられはじめる（註5）。本遺

第21図　千曲川左岸地域の中世遺跡

跡で出土した遺物についてもこうした動向のなかで考える必要があるが、今回はその指摘にとどめ、今後の課題としたい。

近世の陶磁器片には、近世前半（17世紀～18世紀前半）では天目茶碗、志野の丸皿、黄瀬戸の丸皿がみられ、近世後半（18世紀後半以降）では瀬戸美濃陶磁器、伊万里碗、唐津碗などが出土した。また寛永通宝2点も認められた。特に、59号土坑からは瀬戸美濃の鉄釉陶器片が出土している。検出された土坑のなかには近世およびそれ以降に属するものが含まれていると考えられる。

八千穂村内での遺跡の発掘調査の事例は決して多くはないが、本書が地域の歴史を解明するための貴重な資料になり、今後多方面にわたって利用されることを願うものである。

平成16年12月　調査終了後の風景

註

1　佐口区では明治時代以降、山林や原野の開墾が盛んに行われ、戦後には開田工事が進む一方で一時はリンゴの栽培も盛んだった。本遺跡の所在する馬込地籍を中心に、周辺の約5町歩に苗木1万本が植えられた。今回の調査範囲においても現在及び過去にリンゴ畑であった部分が大半であった。今回の調査範囲でもこうした営農の影響を受けていると考えられる。

2　佐口という名の由来は、氏神様を祀る諏訪社境内の石段の中ほどに検地のための道具である「ジャグチ」を埋めたと伝えられるが、この「ジャグチ」がいつのまにかサグチに転化されたものとの説、諏訪様である諏訪明神を祀る諏訪神社の案内人が住んでいたことから佐口と呼ばれるようになったとの説、またかつて社宮寺があったとの言い伝えがあることから、「シャグウジ」が転化して「サグチ」となったとの説などがあるがはっきりしたことはわかっていない（長野県史刊行会民俗資料調査委員会1980）。

3　元治年間頃までは畑村と称していたが、その後に上畑・中畑・下畑の3村に分かれた。佐口は中畑村に属していた。そして明治9年にこの3か村に大窪村を加えて畑村となったのである。なお、小沢吉文氏がまとめた八千穂村江戸時代石造物数（墓地を除

く）によれば佐口で最も古い石造物は寛文年間のものである（長野県史刊行会民俗資料調査委員会1980）。

4　「高白斎記」（信濃史料刊行会1958）による。

5　太閤検地の頃には佐口の戸数は６・７戸であったといわれている（長野県史刊行会民俗資料調査委員会1980）。

引用参考文献

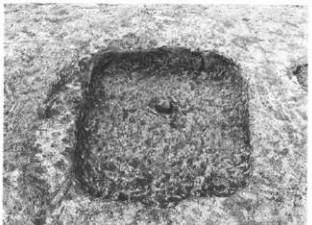
佐久町教育委員会2002『小山寺窟遺跡』
信濃史料刊行会1958『信濃史料　第十一巻』
長野県史刊行会民俗資料調査委員会1980『佐口民俗誌稿』
南佐久郡誌刊行会1998『南佐久郡誌　考古編』
八千穂村誌刊行会2003　『八千穂村誌　第四巻　歴史編』

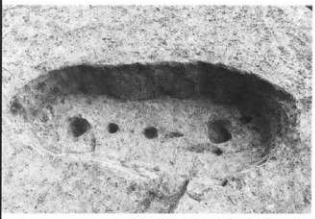
北からの遺跡遠景

南東からの
遺跡遠景
（矢印が遺跡）

左：深掘りトレンチ
土層断面

右：1号竪穴状遺構
（南から）



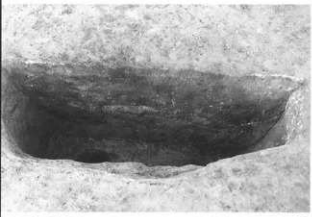


左：28号土坑
（北から）

右：28号土坑
断面
（東から）

左：90号土坑
（西から）

右：91号土坑
（東から）



左：91号土坑
断面
（南から）

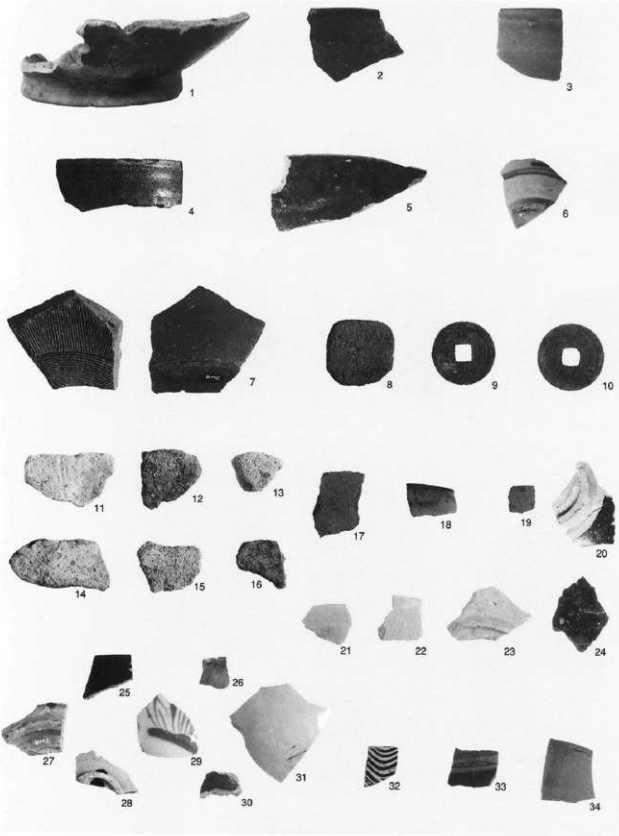
右：91号土坑
断ち割り
（南から）

左：92号土坑
（東から）

右：92号土坑
断面
（西から）

左：105号土坑
（西から）

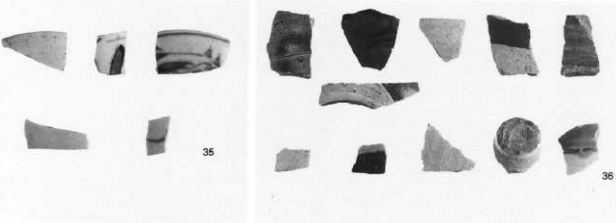
右：105号土坑
断面
（東から）



1 第19図－1
2 〃 －2
3 〃 －4
4 〃 －5
5 〃 －6
6 〃 －7
7 〃 －8
8 〃 －9
9 〃 －10
10 〃 －11

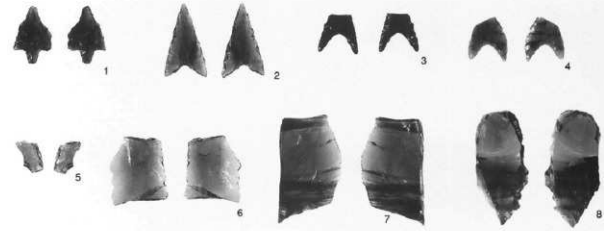
11～16 縄文土器
17～19 古代土器
20 59号土坑
瀬戸・美濃

21～24 近世前半
21 大窯丸皿
22 黄瀬戸丸皿
23 志野丸皿
24 天目茶碗
25～30 瀬戸・美濃
31 京焼
32～34 唐津



35 伊万里
36 瀬戸・美濃
(近世後半)

番号は第20図と同じ



報告書抄録

書名	広域営農団地農道整備事業佐久南部地区埋蔵文化財発掘調査報告書－八千穂村内－
ふりがな	こういきえいのうだんちのうどうせいびじぎょうさくなんぶちくまいぞう ぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょーやちほそんないー
副書名	馬込遺跡
巻次	
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	74
編・著者名	桜井秀雄
編集機関名	(財)長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 Tel　026-293-5926　Fax　026-293-8157
発行年月日	2005年（平成17年）3月11日
所収遺跡名	馬込遺跡　まごめいせき
所在地	長野県南佐久郡八千穂村大字畑4611－1番地ほか
コード	市町村20308・村遺跡番号40
緯度・経度	北緯36°09′02″　　東経138°27′44″ （旧日本測地系　　北緯36°08′51″　　東経138°27′56″）
調査期間	2002年9月2日～12月25日，2003年9月1日～12月25日
調査面積	14,000m²
調査原因	広域営農団地農道整備事業佐久南部地区
種別	散布地
時代	縄文時代、平安時代、中・近世
主な遺構と遺物	竪穴状遺構１基、土坑104基（陥し穴５基を含む）
特記事項	縄文時代の陥し穴が５基発見された。 中・近世では内耳鍋片・陶磁器片等が出土した。

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　74

広域営農団地農道整備事業佐久南部地区
埋蔵文化財発掘調査報告書
―八千穂村内―

馬込遺跡

発　行　平成17年（2005年）3月11日
発行者　長野県佐久地方事務所
(財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田963―4
TEL　026-293-5926
FAX　026-293-8157
Email　maibun@grn.janis.or.jp
印　刷　富士印刷株式会社
〒380-0911　長野市稲葉909